

中田浦遺跡

発掘調査報告書

1993

山形県
山形県教育委員会

なか　た　うら
中田浦遺跡
発掘調査報告書

平成 5 年 3 月

山　形　県
山形県教育委員会

序

本書は、平成4年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した中田浦遺跡の成果をまとめたものです。

中田浦遺跡は、山形県庄内平野の北端に位置する遊佐町に所在します。遊佐町は、雄大な鳥海山をはじめとする豊かな自然と広大な田園地帯が開けた町です。

調査では、平安時代の一般集落の母屋や倉庫と考えられる壠立柱建物跡や、井戸跡・土壙・烟跡などが発見され、これらに関連して土器や木製品をはじめとする多くの遺物が出土しました。自然地形に沿って配置された造構群からは、当時の村落の生活形態を窺い知ることができるものと思われます。

埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産であり、一度壊してしまえば二度と元に戻らないものです。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活の有様を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶとともに愛護し子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務といえるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りという立場から、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成5年3月

山形県教育委員会教育長 木場清耕

例　　言

- 1 本書は山形県農林水産部の委託を受けて、山形県教育委員会が平成4年度に実施した
県営は場整備事業（高瀬川地区）にかかる、「中田浦遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、山形県鮎海郡遊佐町大字当山字西山崎である。
- 3 発掘調査は、平成4年7月1日から同年8月11日まで、延べ29日間に亘って行った。
- 4 調査体制は下記のとおりである。
調査主体 山形県教育委員会
調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者 事務局長補佐 佐々木洋治（調査担当）
　　主任調査員 阿部明彦 須賀井新人
　　調査員 眞壁建
事務局事務局長 深瀬征二
　　事務局長補佐 鈴木常夫（庶務担当）
　　主任調査員 野尻侃
　　主任事務員 永井健郎
事務員 渋江正義 松本明美 高橋由佳 志田恵子 大内千賀子
- 5 調査においては、山形県農林水産部農地建設課、庄内支庁経済部月光川土地改良事務所、遊佐町教育委員会、月光川土地改良区、庄内教育事務所などの関係機関、並びに地元の方々に御協力を得た。
- 6 本書の作成・執筆は須賀井新人・眞壁建が担当した。編集は安部実・眞壁建が担当し、全体を佐々木洋治が総括した。
- 7 調査記録および出土遺物については、山形県教育委員会で一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。
S A…構造跡 S B…掘立柱建物跡 S E…井戸跡 S D…溝跡
S K…土壤 S P…小穴 S X…性格不明遺構 E P…柱穴
- 2 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
 - (1) 調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
 - (2) グリッドの南北軸は、N-38° 40' -Wを測る。
 - (3) 土器実測図で断面黒ベタは須恵器、白ヌキは土師器・赤焼土器を示している。また、外側に網点を付したものは黑色処理されたことを表している。
 - (4) 土器拓影図で、器表面の拓本は断面左側に表した。
 - (5) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。

目 次

I 調査の経緯	IV 出土遺物
1 調査に至る経過	1 土師器
2 調査の経過	2 須恵器
II 遺跡の概要	3 赤焼土器
1 地理的環境	4 陶器
2 歴史的環境	5 木製品・自然遺物
3 遺構と遺物の分布	Vまとめと考察
III 検出遺構	
1 据立柱建物跡	表
2 井戸跡	表1 遺物観察表(1)
3 土 壤	30
4 横列跡	表2 遺物観察表(2)
	31

挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第11図 S K48土壤	18
第2図 調査区概要図	4	第12図 S A10横列	19
第3図 遺構配置図	5	第13図 土師器	22
第4図 2・5トレンチ遺構配置図 ..	7	第14図 須恵器(1)	23
第5図 遺物分布図	8	第15図 須恵器(2)	24
第6図 S B1・2据立柱建物跡 ..	11	第16図 須恵器(3)	25
第7図 S B3・4据立柱建物跡 ..	13	第17図 赤焼土器(1)	26
第8図 S E15井戸跡	15	第18図 赤焼土器(2)	27
第9図 S K23・30・44・57土壤 ..	16	第19図 赤焼土器・中世陶器他	28
第10図 S K45・67土壤	17	第20図 木製品	29

図 版

図版1 調査A・B区全景	図版10 B区遺構完掘状況 他
図版2 A区調査前状況 他	図版11 A区・B区完掘状況
図版3 S B1・2据立柱建物跡検出状況 他	図版12 出土遺物(1)
図版4 S E15井戸跡検出状況 他	図版13 出土遺物(2)
図版5 S E15井戸跡土層断面 他	図版14 出土遺物(3)
図版6 S K23土壤土層断面 他	図版15 出土遺物(4)
図版7 S K44土壤完掘状況 他	図版16 出土遺物(5)
図版8 S K67土壤土層断面 他	図版17 S E15井戸枠(1)
図版9 S K48土壤遺物出土状況 他	図版18 S E15井戸枠(2)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

中田浦遺跡は、昭和48年に行われた庄内広域営農団地農道路整備事業にかかる遺跡分布調査によってその所在が確認された。昭和53年発行の「山形県遺跡地図」には、遺跡番号2091として記載・登録されている。

遺跡を含む遊佐町高瀬川地区に、継続的な県営ほ場整備事業が計画されたのは平成元年のことである。この年の10月および平成2年10月、事業との調整に資する目的で遺跡確認調査を実施した結果、従来より広範に遺物の散布が認められたことにより、遺跡範囲を修正することとなった。これを受けて平成3年10月には、遺跡の内容と正確な範囲を把握するために約400箇所の試掘調査を実施した。その結果、下山崎集落西側において、町道を挟んだ南北2つの地区に遺構・遺物の集中箇所が認められ、当初の遺跡範囲であるJR羽越本線東側と合わせた3地区から構成されることが判明した。遺構・遺物の内容から、遺跡は平安時代の集落跡と認識された。

これらの資料を基に、事業主体である月光川土地改良事務所等の関係機関と、保存協議や遺跡の取り扱いについて調整を重ねてきた。その結果、工法上削平により止むを得ず破壊される部分について、緊急発掘調査を実施することとなった。また、線的に掘削を行うほ場整備の灌漑排水路工事が遺跡範囲にかかる箇所については、随時立ち会い調査を実施して記録保存を図ることにした。

2 調査の経過（第2回）

調査区は平成3年度試掘調査の結果から、遺跡の遺存状況が良く面的対応が必要な範囲について設定した。大小ふたつの調査区に分かれ、面積はA区2,000m²、B区800m²である。また、立ち会い調査を行った排水路部分は幅2mを基準にしたトレンチとし、遺跡範囲にかかる5本の総延長は320mとなる。

調査期間は、平成4年7月1日から8月11日までの29日間である。先ず初めに、計画排水路のセンター杭を基準に遺跡全域を覆うグリッドの設定を行い、重機械による表土剥離後、調査区内に1区画5×5m単位のグリッド杭を設置した。約5cm程残る遺物包含層を削りながら、A区→B区の順で遺構検出作業を進めた。写真や図面等の諸記録を順次行い、7月16日より遺構精査を開始している。調査の進行に従って、遺構の内容や遺跡の性格が次第に明らかとなっていた。7月21日、計画排水路部分の調査について事業者と現地打ち合わせを行い、同28日と8月4日の2回に分け重機械を導入しての表土除去を実施することとなった。遺構検出区域については、精査および記録作業をA・B区と平行して進めていた。8月6日、ほぼ遺構を完掘した状況で空中写真測量を外部に委託して行った。7日には一般を対象にした調査説明会を開催し、約100名が発掘現場を訪れた。最終日まで図面等の記録作業に追われながら遺物の取り上げ等を完了させ、排水路部分と合わせて事業者側に現地を引き渡し、発掘調査を終了した。

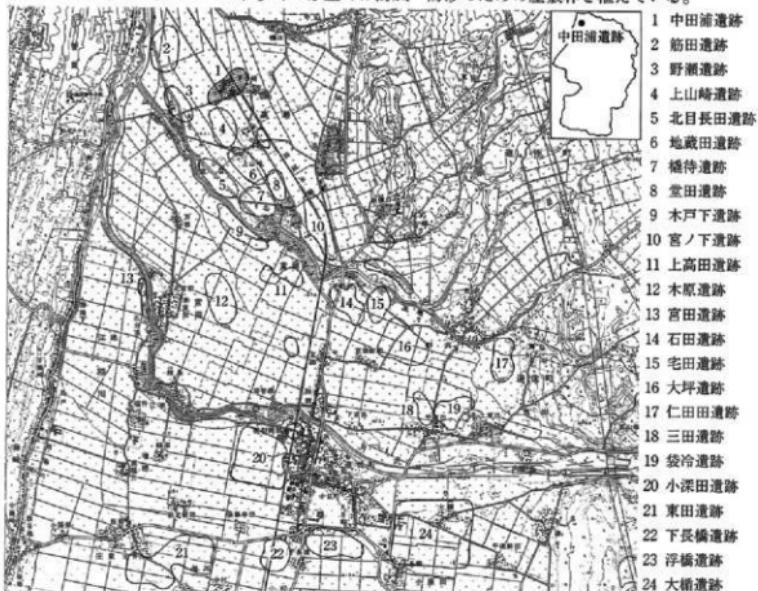
II 遺跡の概観

1 地理的環境

山形県北西部に位置する遊佐町は、鳥海山を境に秋田県と接する。その地形は、月光川や庄内高瀬川などによって形成された沖積平野と、日本海岸に沿った西山と呼ばれる砂丘地帯、および北東部の出羽丘陵に大別される。河川の発達は、時には水害をもたらしながらも肥沃な土地を与え、現在の広大な水田地帯の基盤となっている。

中田浦遺跡は遊佐町の中心部から北西方向へ約4km、下山崎集落を中心とした水田中に所在する。平安時代には海岸近くにまだ砂丘が発達せず、河川は蛇行しながら幾筋も流路を作るため、いたる所に後背湿地が形成されたと想像でき、現在の景観とはかなり異なっていたと考えられる。後背湿地を抱えた自然堤防上の微高地は、居住域として好適な場所であり、集落遺跡はこうした地形や環境に適合した自然村落と理解される。開拓が進み、平坦な水田地帯が急速に広がっていったのは江戸時代以降であり、開拓当時の村の近辺には葦原が広がっていたと地元では言われている。

この地方の気候は、一日の寒暖の差が小さい海洋性に属している。夏は西からの浜風により湿度が低いため、内陸部と比較すると過ごしやすい。一方、冬は曇りの日が多く日照時間は夏の4分の1程度であり、時折強い季節風が吹き荒れて地吹雪となる。四季を通じて季節風の影響を受けるため、多くの家屋では防風・防砂のための屋敷林を植えている。



第1図 遺跡位置図 (S=1:50,000)

2 歴史的環境（第1図）

飽海郡の平野部に点在する遺跡の多くは、平安時代を中心とする集落跡である。周辺には筋田・地蔵田・北目長田・宮ノ下遺跡等、中田浦とほぼ同時期の遺跡が庄内高瀬川に沿って立地している。これらの集落は、各調査の成果からみて奈良時代から平安期に入る9世紀初頭頃から急激に増加したと推察される。高瀬川やその南側の月光川流域で確認されている平安時代の遺跡の中には、出羽国府「城輪柵」の設置を契機に、例えば土地開拓などを目的として計画的に造営された村落、すなわち古代遊佐郷における官的機能を有した遺跡である可能性も指摘されている。その理由として、建物跡を板木列で囲む例や地鎮関連の構造が検出されるなど、一般的な集落とは異なる遺跡が確認されたことが挙げられる。

「遊佐」の地名は10世紀初めに成立した『延喜式』に見られる「遊佐駅」が初見である11世紀頃には折門家領として「遊佐荘」が成立するが、荘官として実質上支配していたのは奥州藤原氏であった。中世鎌倉期の遺跡としては、大槻の地名が残る大槻遺跡が広く知られている。2次のわたる発掘調査の結果、柵木列とその内部に規則的に配置された建物跡を検出している。遺物には13世紀代の国産・輸入陶磁器が多く見られ、遊佐殿の館跡または「川北冠者患衝」の居館と推測されている。また、南北朝期に当地の支配者であった「北目地頭新留守殿」の居館に推定される北目館跡の他、宮田・野沢・平津・蕨岡の各地に当該期の館(柵)跡が確認されているが、地域の文献史料が乏しいことからこの時期の動向について定かではない。

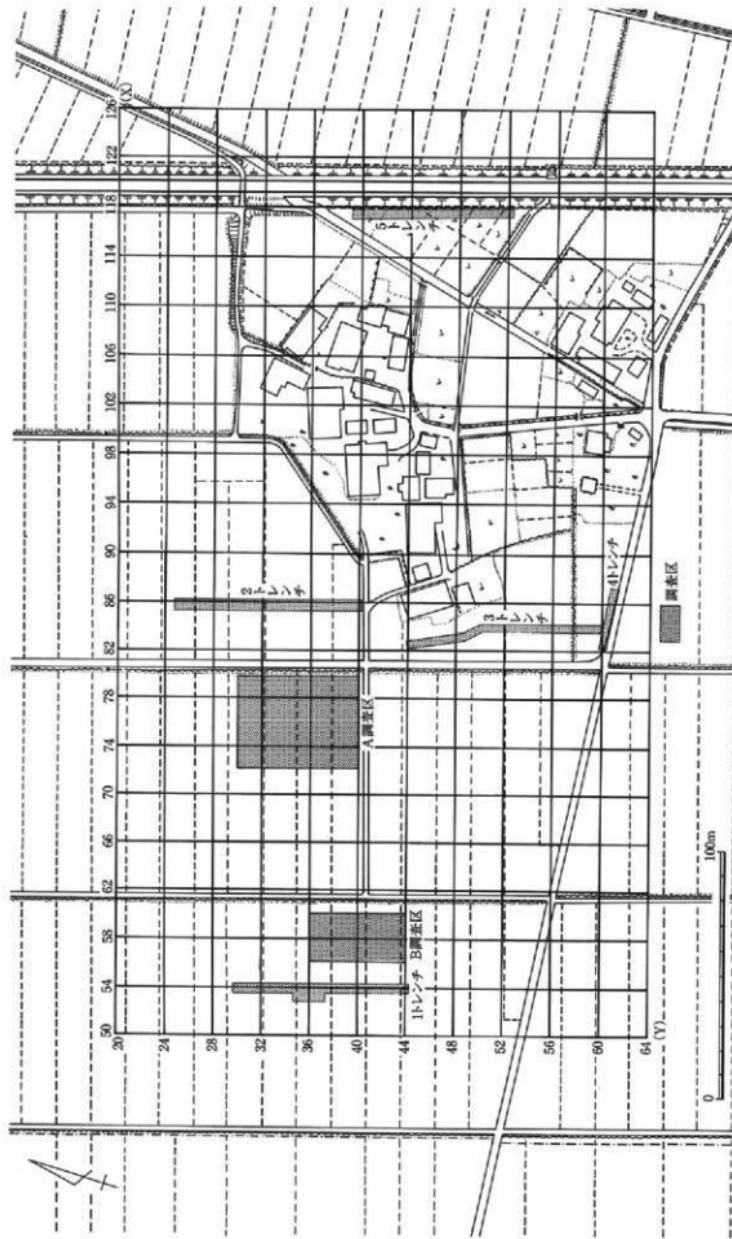
3 遺構と遺物の分布（第3～5図）

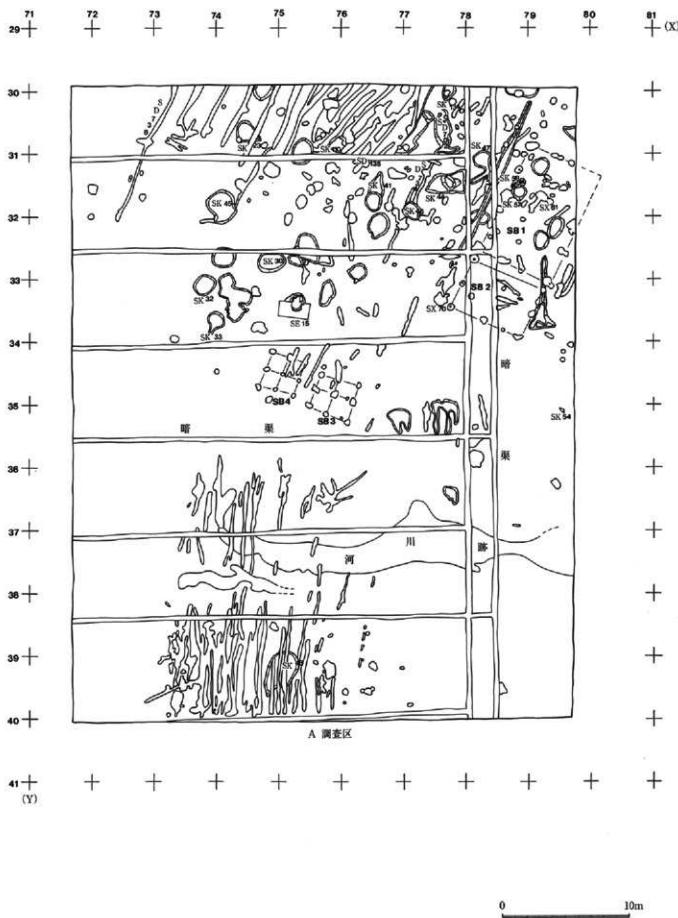
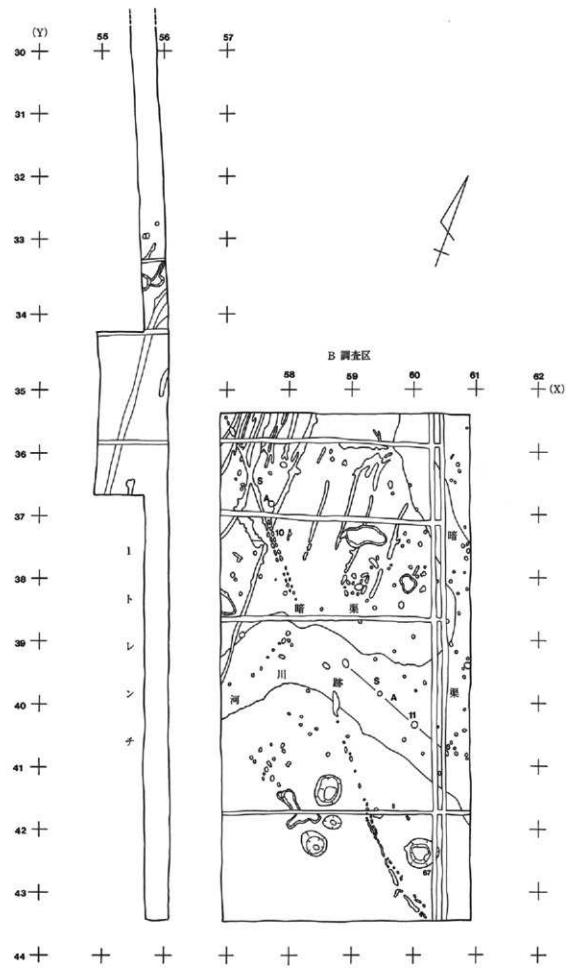
遺構・遺物の分布する範囲は、分布調査等の結果から東西400m、南北200m以上に及ぶと推測される。集落が営まれていた当時は、現在のような平坦な地形ではなく起伏があったと想像され、基盤のより高い安定した場所へ集落を形成したと考えられる。したがって、建物跡ほかの集落要因遺構が主体的に分布する場所は、高乾で水捌けの良い自然堤防上の微高地であったと捉えることができる。

A区では、その北半に建物跡や土壙などの遺構が密集して検出された。灌漑排水路の計画線形に沿って調査した2トレンチの遺構分布と合わせ、居住域の広がりはさらに北側へ続く様相が認識できる。南半部には畝状溝跡群が検出されたが、北半に比べ低湿なため居住域の中心から外れることが、遺構の分布状況からも窺える。3・4トレンチの調査から、A区以南では基盤層が低湿で泥炭質となり明確な遺構も無かったため、おそらく水田であったと想像される。B区では建物跡や井戸跡は検出されなかったが、中央部の河川跡をはさんで土壙・畝状溝跡などが配され、A区から一連で続く遺構群の一端と理解された。

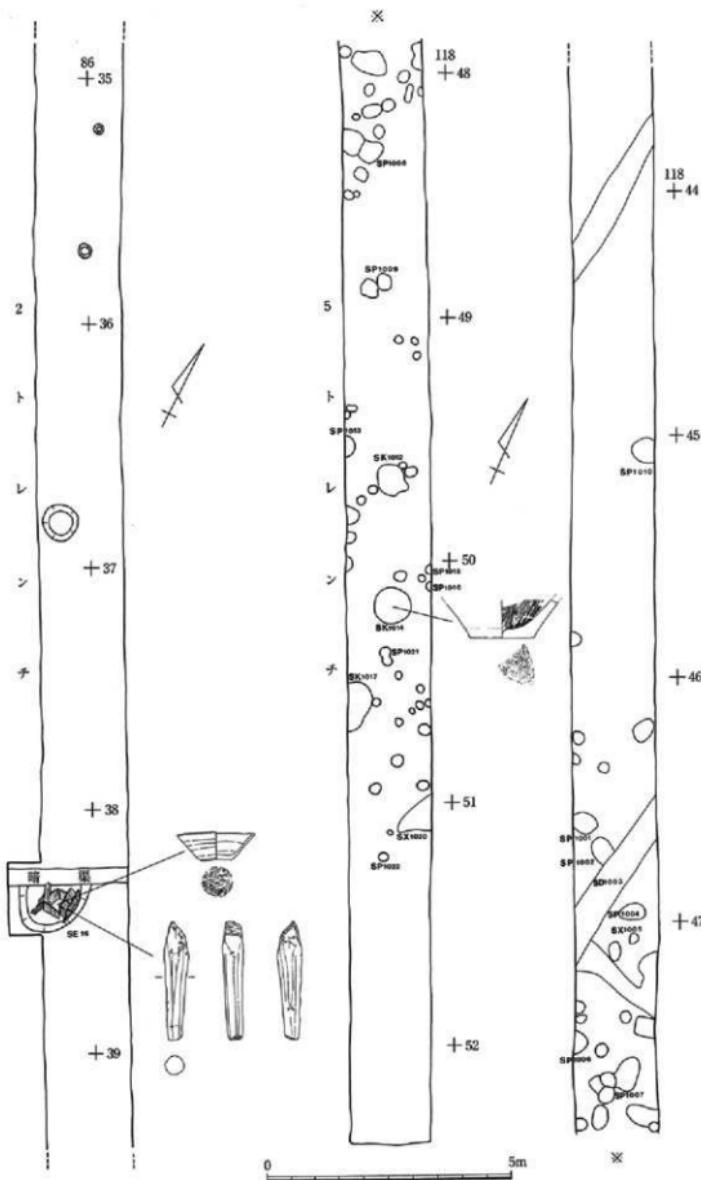
一方、遺物は遺構検出作業段階でその多くが出土したが、SK45・67等の土壙はじめ遺構内にもまとまったものが認められた。遺構内も含めグリッド単位の出土分布状況は、第5図に示した通りであり、概ね遺構の分布状況と基を一にしているものと判断されよう。A区では北半部と調査区南西端に集中域が見られ、特に遺構が検出されない南西隅にも多く出土する在り方は、低湿地への二次的な流れ込みや投廃棄とも考えられる。

第2図 調査区概要図(S=1:2,000)



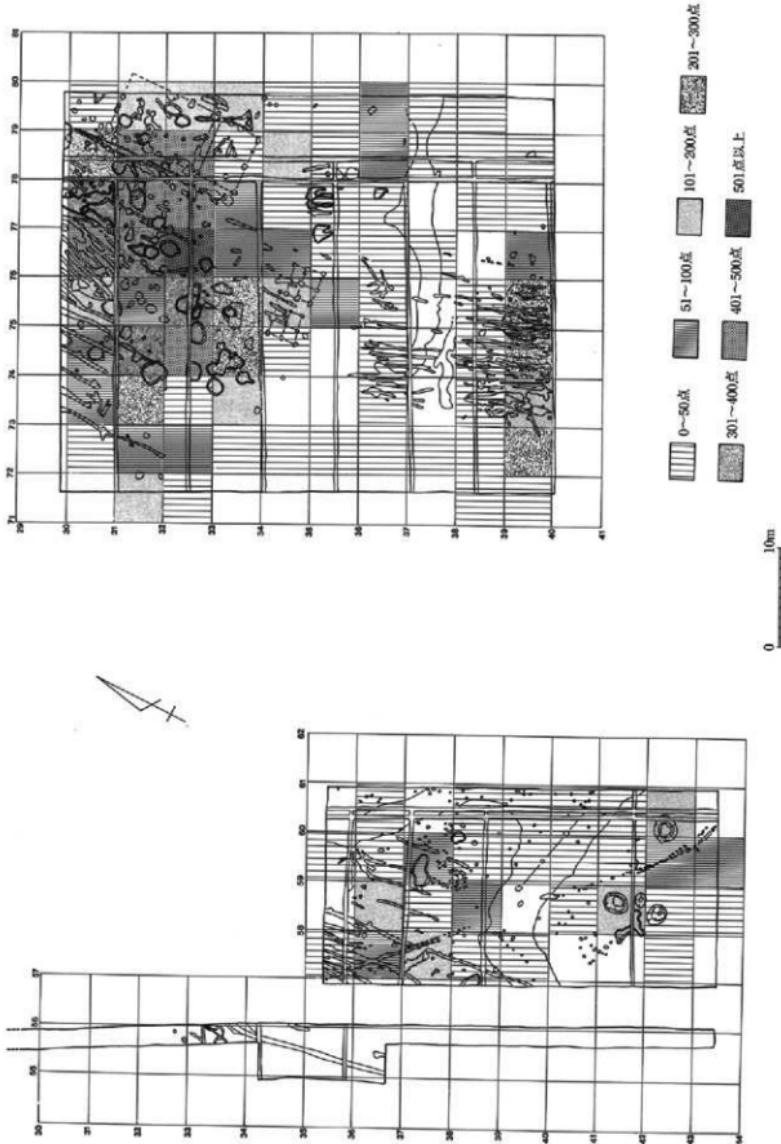


第3図 造構配置図 (S=1:300)



第4図 2・5トレンチ造構配置図 (S=1:100)

第5図 遺物分布図 (S=1:500)



III 検出遺構

1 堀立柱建物跡（第6・7図、図版3）

A区北半部より主軸方位を同じにする4棟の建物跡を検出した。以下では、これら建物跡の規模・間尺・掘り方・出土遺物等について概要を記す。

S B 1は、A区79-32グリッドに中心をおく東西三間・南北四間の南北棟で、母屋と考えられる建物跡である。北東角部が調査区外へ掛かるため建物全体は検出できなかつたが、規模は身舎西面の桁行長9.0m、南面梁行長が6.3mを測る。各面における柱間距離がまばらで、間尺は6尺～9尺と不整である。柱穴は径30～60cm、検出面からの深さ20～50cmを測り、掘り方においても不揃いが目に付く。一部の柱穴には15cm程度の柱根が認められた。遺物は各柱穴から計73点の土器片が出土しており、赤焼土器壺の破片が最も多い。年代的にはE P 5より出土した内黒土師器壺の特徴から、9世紀中葉と捉えられる。

S B 2は、S B 1建物跡の南に隣接する二間・二間規模の付属屋と考えられる東西棟である。桁行長6.0m・梁行長4.2mの大きさで、柱間は桁行10尺・梁行7尺を測るが、北面桁行では中間に柱穴が確認できなかつた。掘り方の径は40～70cm、深さ30cm前後で、西面柱列E P 1～3には柱根が遺存していた。遺物はE P 4・7を除く各柱穴から須恵器3点、赤焼土器11点、黒色土器1点の破片類が出土している。

S B 3・4は、A区中央の75・76-34・35グリッドに位置し、東西二間・南北二間の総柱建物で倉庫跡と考えられる。柱間は4尺ないし5尺と小規模であり、2棟の建物間も4尺の距離をおいて東西方向に並んで配置される。掘り方は径30cm内外の円形状を呈し、確認面から20cm程の深さのものが大半である。各柱穴とも柱根は認められなかつたが、覆土断面からその痕跡と認識できる柱穴が存在した。出土遺物は須恵器・赤焼土器の小片が9点と少なく、時期を特定できる内容のものではない。

2 井戸跡（第8図、図版4・5・17・18）

井戸跡はA区で検出したS E 15と、A区東側の灌漑排水路にかかる2トレンチで検出したS E 16の2基がある。

S E 15は75-33グリッド上、S B 4建物跡の約4m北側に位置している。掘り方の形状は径150cm程の略円形を呈し、深さは検出面から約130cmを測る。井戸枠は丸木船を井戸材に転用したと考えられるもので、大木を半截し割竹状に削り貫いた材を縦板として円形状に組み合わせた構造となっている。枠組みは土圧によりかなり変形して南東方向に傾いていたが、西側では縦板材の一部を重ね合わせて二重に構築している部分が確認された。井戸枠内の下端部では、縦板を支えるため一辺70cm方形に組まれた横桟が認められた。弯曲した縦板の一枚には水抜き用と考えられる方形の穴や、外面にはぞ状の四角い凹みをもつ板材が存在した。遺物は井戸枠内の覆土7層からの出土が主であり、須恵器・赤焼土器等の破片が124点と曲物等の木製品が数点ある。掘り方の底面直上からは、墨書き六文字を認める板片(99)が出土している。なお、井戸の構築は9世紀後半以前と考えられる。

3 土 壤 (第9~11図、図版6~9)

A区北半部やB区南半部を中心として、30基程の土壙が検出された。以下では、まとまつた遺物が出土した土壙を主に、挿図にしたがって概述する。

S K30はA区74~32グリッドに位置しており、その北辺を暗渠によって切られる。平面形は梢円形を呈し、長径216cm・短径142cmの規模である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは18cm程を測る。周壁は南側で比較的穏やかに立ち上がるが、他は急激に掘り込まれる。なお、覆土の堆積状況からは2基以上の重複関係が指摘された。出土土器は須恵器15点、赤焼土器76点、黒色土器14点を数える。また、最下層より箸・斎串・下駄や棒状の木製品等10点以上が出土しており、一括的な廃棄状況と窺われる。

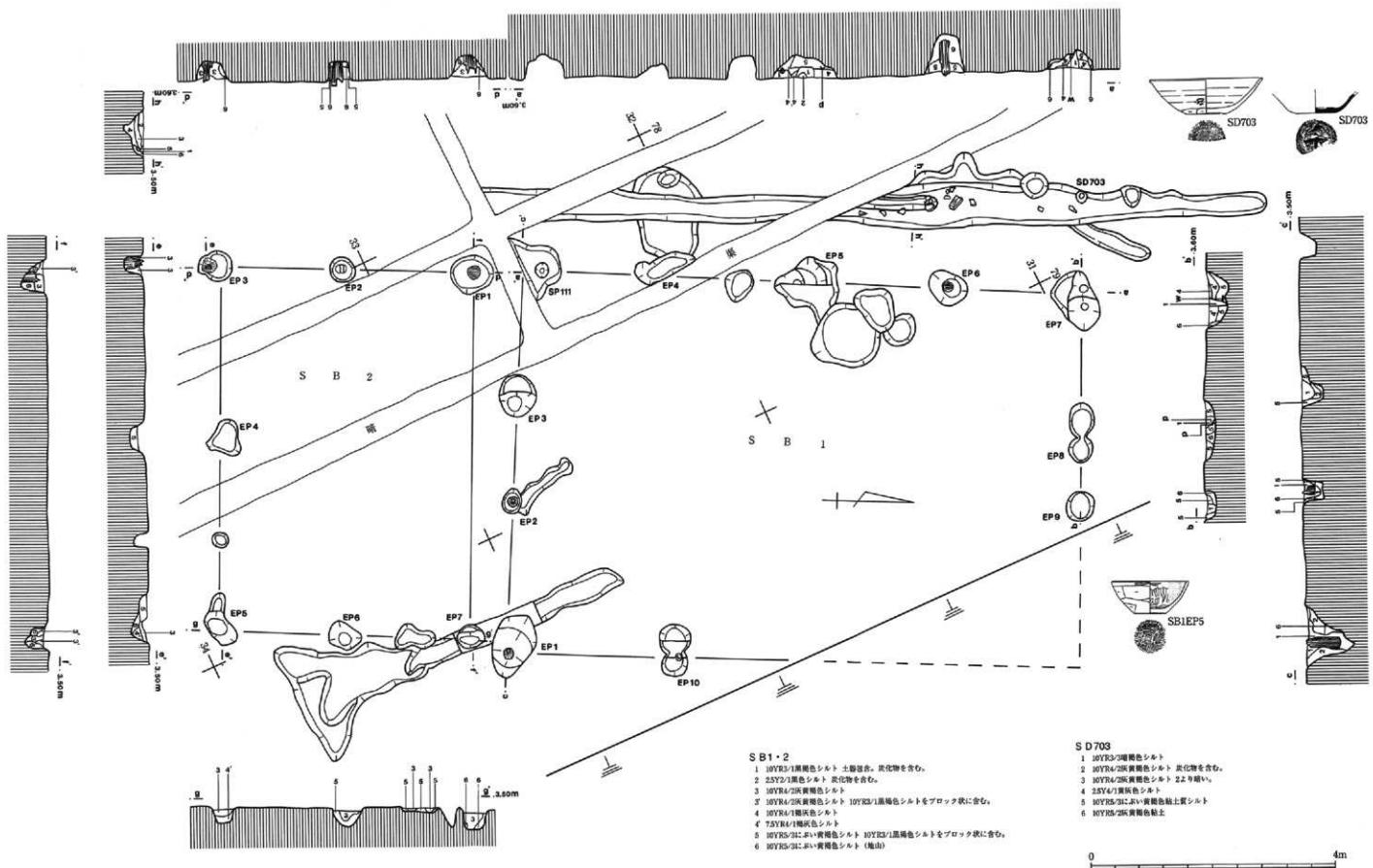
S K45は、S K30の北西約5mの場所で検出された土壙で、平面形は略円形を呈する。南東部で浅い歓状の溝跡と重複しており、この部分がやや広がるような形状となる。規模は長径256cm・短径206cmを測り、ほぼ平坦な底面までの深さは20cmである。覆土は部分的に堆積する焼土層を含め4層からなる。遺物はF 2層下面からF 3層にかけて、赤焼土器を主体とするまとまりある土器群が出土しており注目された。中でも、赤焼土器皿(80)は灰釉陶器の模倣品と推測され、口縁端部の引き出し形態等から猿投窯黒釜14号窯式(K14)に比定される。包含層出土のものながら、灰釉陶器の壺(92)にも合致する在り方と考えられた。須恵器壺や赤焼土器壠などが含まれ、内容的にも良好な一括資料と言えよう。

S K67はB区南東の60~42グリッドに単独で位置し、平面形が梢円形となる土壙である。暗渠により南東部が破壊されるため全体の規模は不明だが、長径270cm内外・短径224cmとなる。外縁部の掘り方は穏やかに行われるが、中央部では段を形成して急激に掘り込んでいる。底面は北から南へ傾斜する形状で、深さは最深部で73cmを測る。覆土は7層からなり、全体的に有機物や炭化物の多い粘質土が堆積している。遺物はF 6層を中心として、赤焼土器壺の完形品を含む土器類が101点出土している。

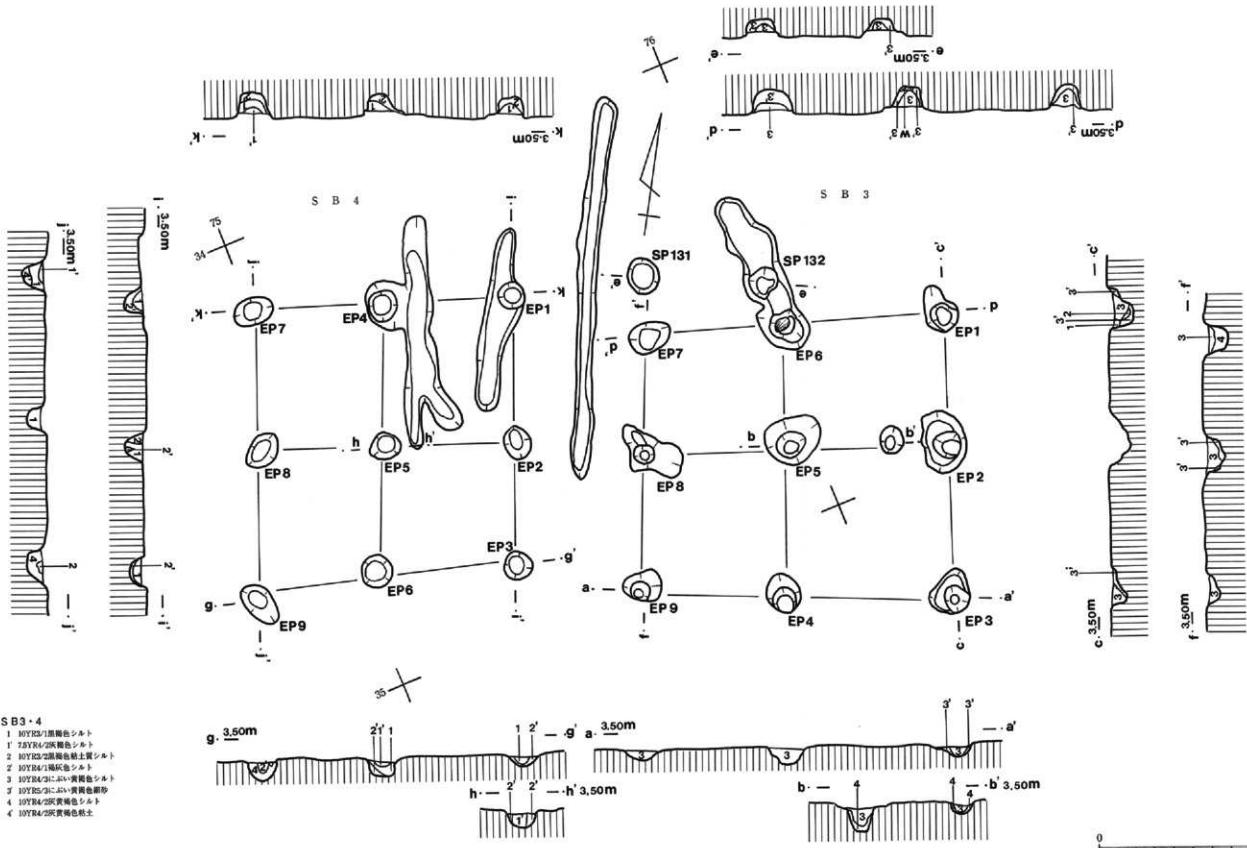
S K48は、A区南端74・75~39グリッドにおいて検出した大型の土壙で、南北に走る歓状溝跡群と重複している。梢円形の平面プランで、長径350cm・短径230cmの規模を有し、深さは25cm前後を測る。覆土は歓状溝跡も含め6層に識別され、F 2~5層にかけて152点を数える遺物が出土した。内訳は須恵器111点、赤焼土器37点、黒色土器3点、木製品1点である。土器種別で須恵器が卓越することや壺類の形態的特徴、また重複関係で歓状溝跡群より先行することから、今回調査した遺構の中では最も古い時期に当たる。

4 横列跡 (第12図、図版10)

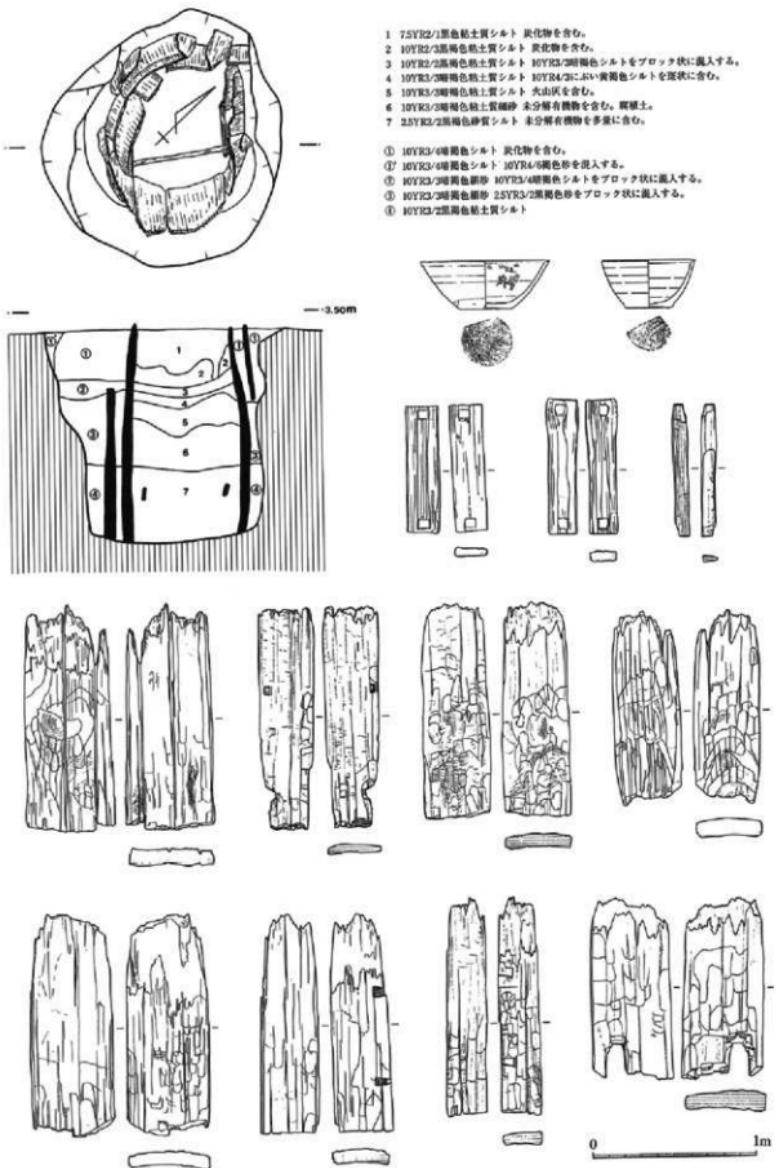
B区を北西~南東方向に継続する横列跡(S A10)と考えられる小穴列が検出された。小穴は規則的に2列並んで配され、一部では布掘りと思われる溝状の掘り方が認められた。B区中央部の河川跡上で途切れる状況となっており、検出できた長さは北・南側とも15m程である。なお、B区西側に設定した1トレンチでは確認されない。出土遺物はいずれも破片類で須恵器8点、赤焼土器43点、黒色土器4点を数える。北西部で歓状溝跡群と重複しこれらを切ることなどから、年代的には9世紀後葉以後の遺構と考えたい。



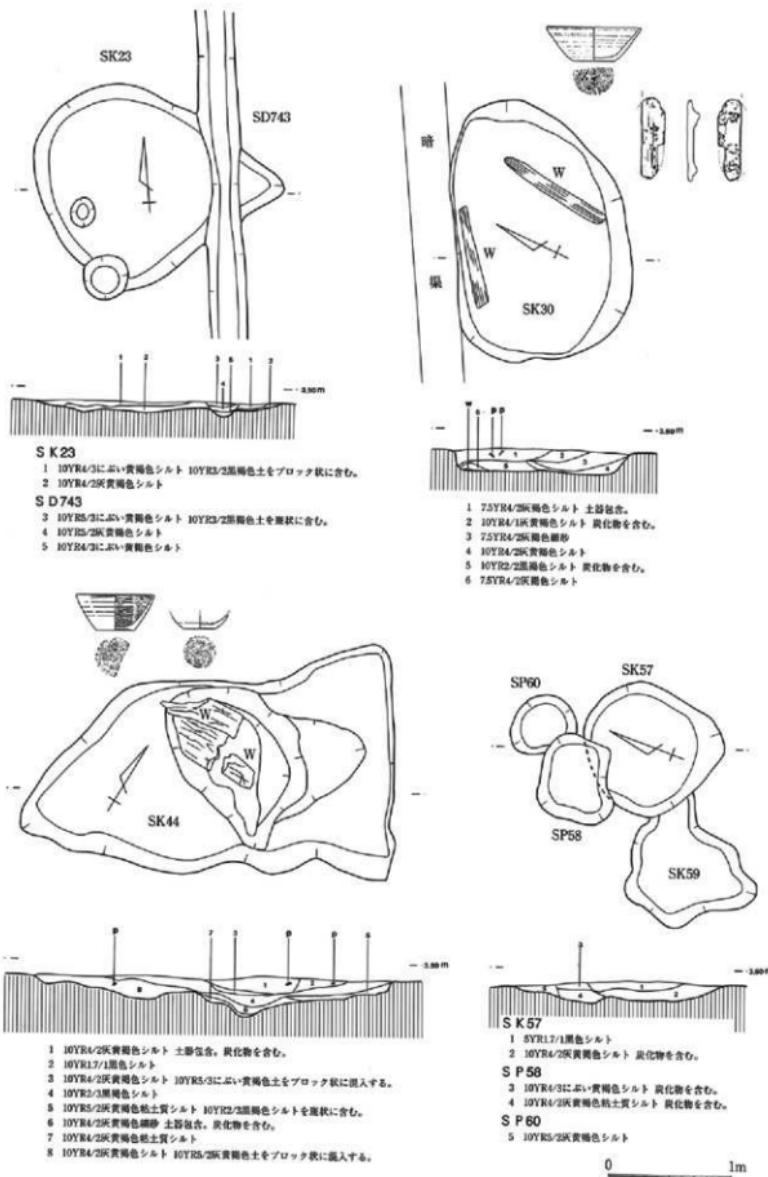
第6図 SB1-2振立柱建物跡 (S =1:60)



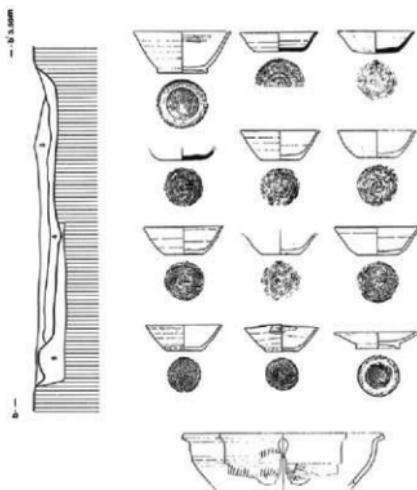
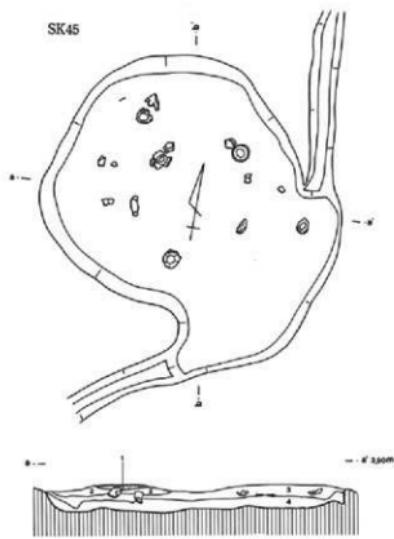
第7図 SB3-4掘立柱建物跡 (S=1:40)



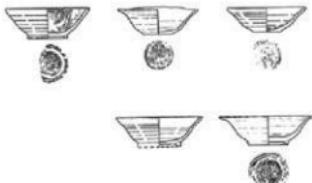
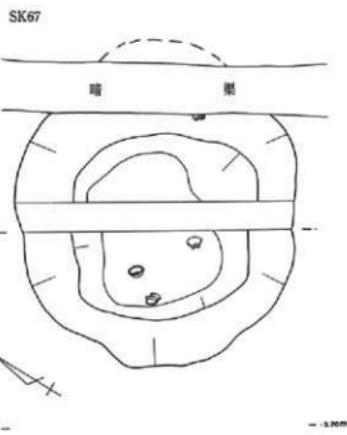
第8図 SE15井戸跡 (S=1:30)



第9図 SK23・30・44・57土壤(S=1:40)



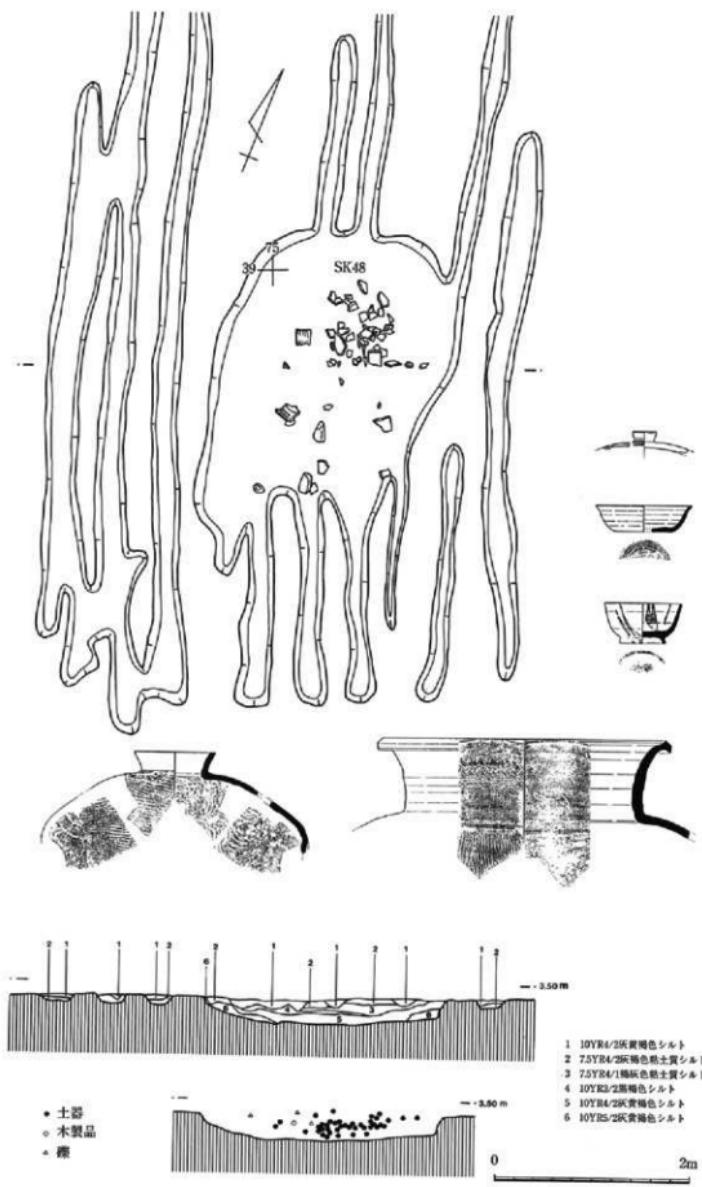
- 1 7SYE7/6褐色粘土 IOYR6/1黒色土をブロック状に盛入する。
- 2 IOYR6/2K黄褐色シルト 土器包含。
- 3 7SYE8/2灰褐色シルト 土器包含。
- 4 IOYRS-2K黄褐色シルト 鹽化鉄分を多量に含む。
- 5 IOYRS-3H1.5-1.8 黄褐色シルト



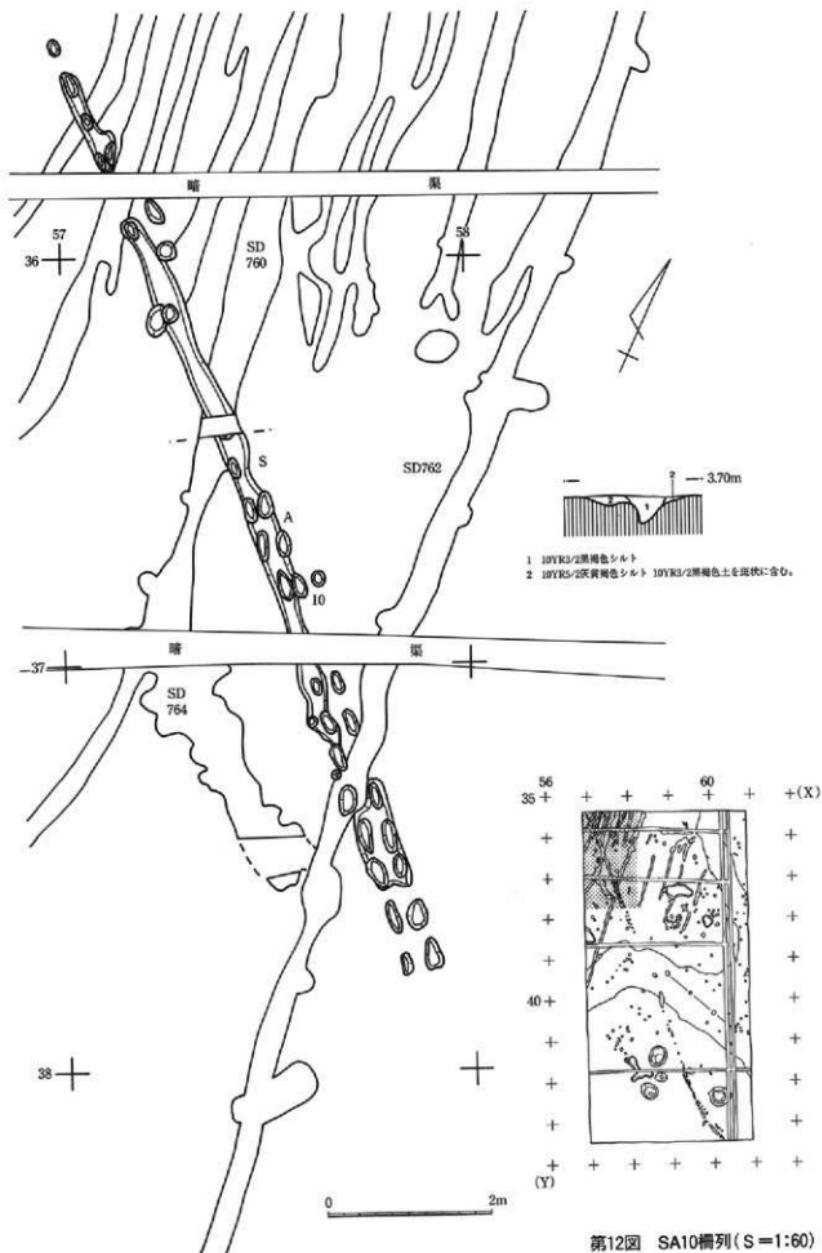
- 1 IOYIC3/1黒褐色シルト IOYR3-3H褐色土を多量に盛入する。
- 2 IOYHL2/1黒色粘土質シルト
- 3 IOYR3-2H褐色粘土質シルト
- 4 IOYR2/2黒褐色シルト
- 5 IOYR2/2黒褐色シルト IOYRS-2K黄褐色土を塊状に含む。
- 6 2SY2/1暗褐色シルト 土器包含。
- 7 2SY4/1深灰色シルト

0 1m

第10図 SK45・67土壤(S=1:40)



第11図 SK48土壤 (S=1:50)



第12図 SA10柵列(S=1:60)

IV 出土遺物

遺物は黒色土器を含む土師器・須恵器・赤焼土器等の土器類を主とした総数約11,500点程が出土している。土器類の種別内訳は土師器9%、須恵器20%、赤焼土器70%、その他中近世陶器1%である。土器以外の遺物では、軒串・下駄等の木製品が若干量、貨幣・キセルといった金属製品4点、土製品(土錐)1点、石製品(砥石)1点、自然遺物(種子)が出土している。遺跡全体において遺物の一括性に乏しく、完形品も極めて少なかったことなどから、以下では図示した資料を中心に種別・器種ごとの概略を記すに止める。

1 土師器 (第13図、図版12)

土師器では非クロロの甕など煮沸形態と、内外面に黒色処理を施した蓋・坏等の供膳形態があり、量的主体は供膳具の坏が占めている。また、黒色処理を何らかの原因で製作段階に省略する例(8~10)を認めたが、ここでは黒色土器の範疇に含めて取り扱う。

坏類は底部切離がいずれも回転糸切りで行われるが、無調整のものとナデによって整形されるものに分かれる。さらに、ナデ整形の坏(5・8)は体部下半にヘラケズリ調整が施される。ミガキ手法は底部~体部が放射状、体部~口縁部で横方向が一般的と観察されたが、10のような全体に横方向のものも認められる。形態的特徴からは、体部がやや内反の椀状や口唇部を丸く收めるものと、体部外傾で直線的に開くものに分けられる。法量的には概ね大型と小型の二種に区別でき、黒色処理を受けない一群が前者に属する。

2は両面にミガキ・黒色処理を施した蓋の上半部資料である。外面は回転させながら同心円状に、内面は一方向に平行して丹念なミガキが観察できる。

2 須恵器 (第14~16図、図版12~14)

須恵器では供膳形態と貯蔵形態が認められた。供膳具の器種には有台・無台の坏および蓋があり、坏類の底部切離はヘラ切り無調整が主体であった。また、貯蔵具の器種には大型壺を中心に長頸壺や横瓶などがある。貯蔵形態については部分的な破片資料のみであり、全体の器形等が不明瞭なため、細部の説明を割愛する。

坏は底部の切り離しからヘラ切りと回転糸切りに分かれ、量的にはヘラ切りのものが77%を占める。ヘラ切りの一群は法量的に、口径124~140mm、底径62~90mm、器高31~38mmの値を示し、器形から細分が可能である。すなわち、A:底径が大きく、体部が直線的に外傾して立つ類(11・14)、B:底径が大きく、体部が内弯気味か直線的に立ち上がり、口縁部で外反する類(12・13・15・16)、C:底部と体部の境が不明瞭で、体部が直線的に外傾する類(17・21)、D:底部と体部の境が不明瞭で、体部が直線的に立ち上がり口縁部で外反する類(19・20・23・24)、E:丸底風の平底でやや器高のある小振りな類(22)、F:底径が小さく、体部が直線的に外傾して立つ類(18)等である。一方、糸切りの一群は例示できた資料が少なく内容を明らかにできないが、浅身で体部の弯曲が強い形態(25)と深身でやや器厚な形態(26)が認められる。

高台付坏は図示した7点の内、底部切離が不明な1点を除いてヘラ切りのものである。

これらは法量や器形から、A：口径130mm程で浅身のタイプ(32)、B：口径100～120mm内外と推測され、体部が内弯気味に立ち上がる深身のタイプ(33～36・38)、C：口径110mm程で、体部が直線的に外傾して開く深身のタイプ(37)等に分類できる。その他、高台の形態や底部・体部との位置的関係などから細分可能と考えられるが、一括性・類型的まとまりが乏しいため割愛する。

蓋は資料の制約から詳細な分類はできない。天井部の切り離しはヘラ切りで行われる。体部から肩部にかけて回転ヘラケズリを施すもの(29)が認められ、法量的に高台付壺Aに対応している。30・31は口径140mm以上と推測され、低い台形様を呈している。

3 赤焼土器 (第17～19図、図版14～16)

酸化焰によって焼成されたロクロ成形の土器を包括して赤焼土器とした。供膳形態と煮沸形態に分かれ、器種に壺・有台壺および皿、甕・壠等が認められた。

壺は底部切離の相異からヘラ切りと回転糸切りに二大別され、量的には後者が主体を占める。ヘラ切り壺ではナデ等を除く再調整が認められず、器形や法量等から判断しても一部を除いて規格性が強いと捉えられる。これらの形態的特徴は、体部の外傾が直線的かやや内弯傾向で、口縁部において弱く外反することである。口縁が外反せずに直線的な51は、他に比較して浅身の形態を呈し須恵器壺F類に近似している。糸切りのものは再調整の有無から、体部下端の狭い範囲に回転ヘラケズリを施す一群(A)と、回転糸切り無調整的一群(B)の二種に分類される。A・B群ともに法量的な大・小があり、60～65および68～79が小型、66・67が大型例と識別できる。さらに、小型器種では体部や口縁部形態の相異、器高と口径の割合等から細分が可能である。すなわち、A1：体部が内弯するもの(60)、A2：口縁部が弱く外反するもの(61～65)、B1：体部が内弯気味に立ち上がる深身な鉢状のもの(75・79)、B2：口縁部が弱く外反するもの(68～70・72)、B3：口縁部が外反して大きく開くもの(71・73・74・76)、等の類別が認められる。日本海沿岸の出羽北半部において赤焼土器壺の形態は、ヘラ切り無調整→回転糸切り・回転ヘラケズリ再調整→回転糸切り無調整という変遷が一般に認識されるところであり、段階を経るごとに、①底径の縮小と器高の増大、②口縁の外傾・外反度合いの増大、③胎土の粗悪化に比例した重み製品の増加、④量産化に伴う製品の簡略化、等へと移行する様相が窺い知れる。

甕・壠は全形の判明する資料はないが、甕では部分片の内容から小型平底甕(85～87)と、丸底形態を呈すると考えられる長胴甕(90)が認められた。平底甕の底部切離は回転糸切り無調整で、87の体部外面には横方向のカキ目が部分的に観察される。長胴甕は頸部が強く締まり、口唇部を垂直につまみ上げる器形のものである。

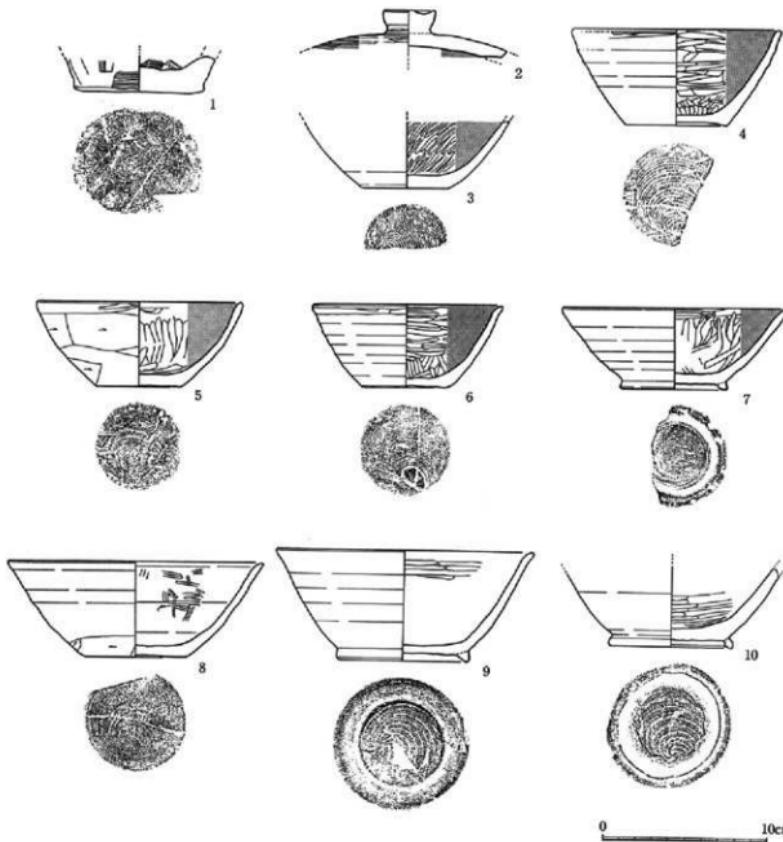
4 開器 (第19図、図版15・16)

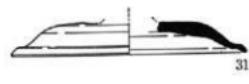
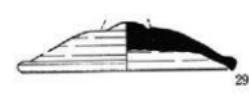
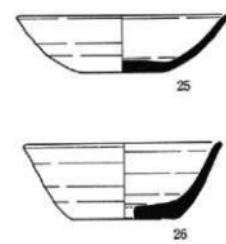
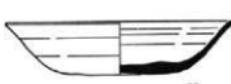
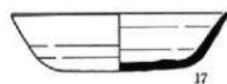
91は近世陶器瀬戸系皿の口縁部資料で、灰釉が施される。92は胎土が緻密な灰釉陶器の筋甕と考えられ、9世紀中葉の黒窯14号窯式(K14)に対比される。外面体部上半に2条の沈線(筋)が巡り、肩部にかけて暗緑色の釉がかかる。93は珠洲系陶器編年V期に対比できる擂鉢で、8条一単位と観察される鉢目を有する。

5 木製品・自然遺物 (第20図、図版16)

木製品はS E15井戸跡やS K30土壤等を中心に若干量が出土している。99はS E15井戸跡掘り方最下層より出土した、墨書が認められる厚さ8mm程の板材である。板材は部分的な破片であり、左右および下部を欠損している。墨書は横目の材に縦書きで記されたと思われ、板材右端の破損部にも墨痕を認めるところから、文字が四行以上に存在したと判断できる。出土した板材片には、末尾三行の頭から二文字分の墨書が右半部に記されており、「老・始」、「行・商」、「乃・家」の六文字を判読できた。箸(100~102)は削り出しによつて製作され、断面が精円形を呈する。簀串(103)は主頭・剣先形の形態である。

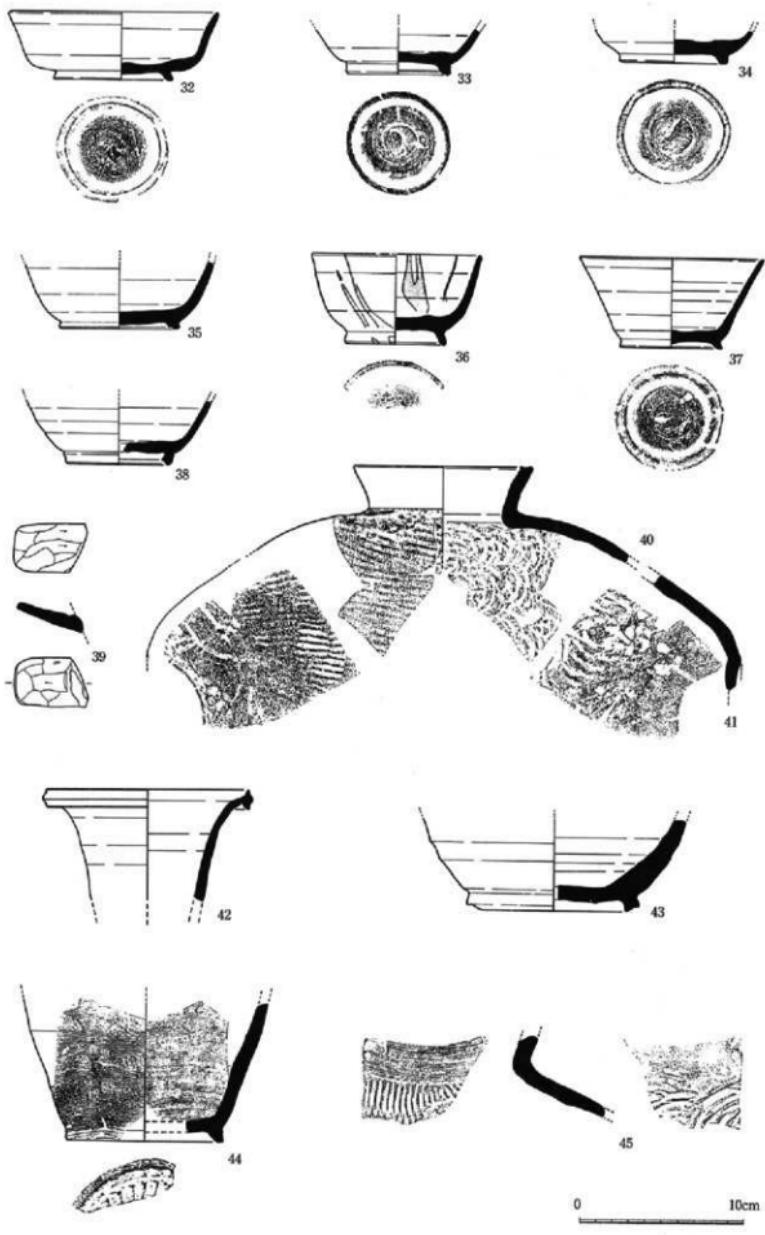
自然遺物としては、A区北西部のS D738溝状遺構内から密集して出土した種子がある。同定結果よりこれらは、炭化していないエゴノキの内果皮であったことを付記しておく。



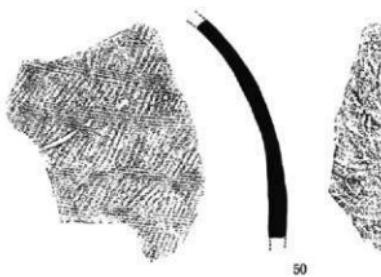
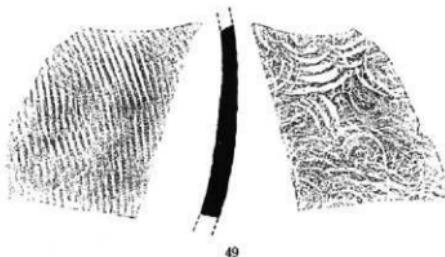
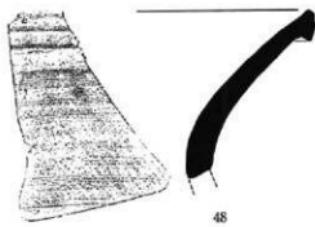
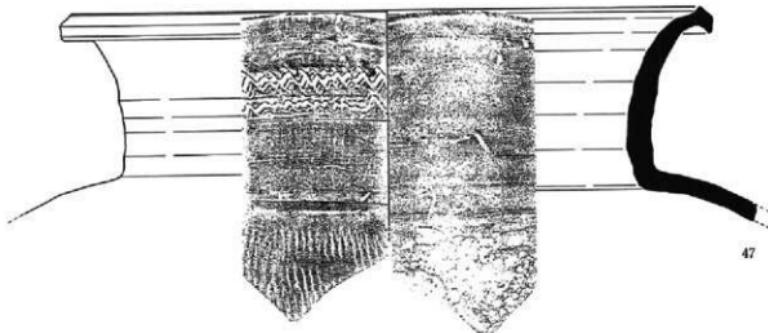
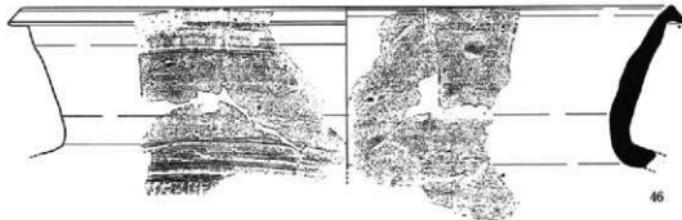


0 10cm

第14図 須恵器(1)

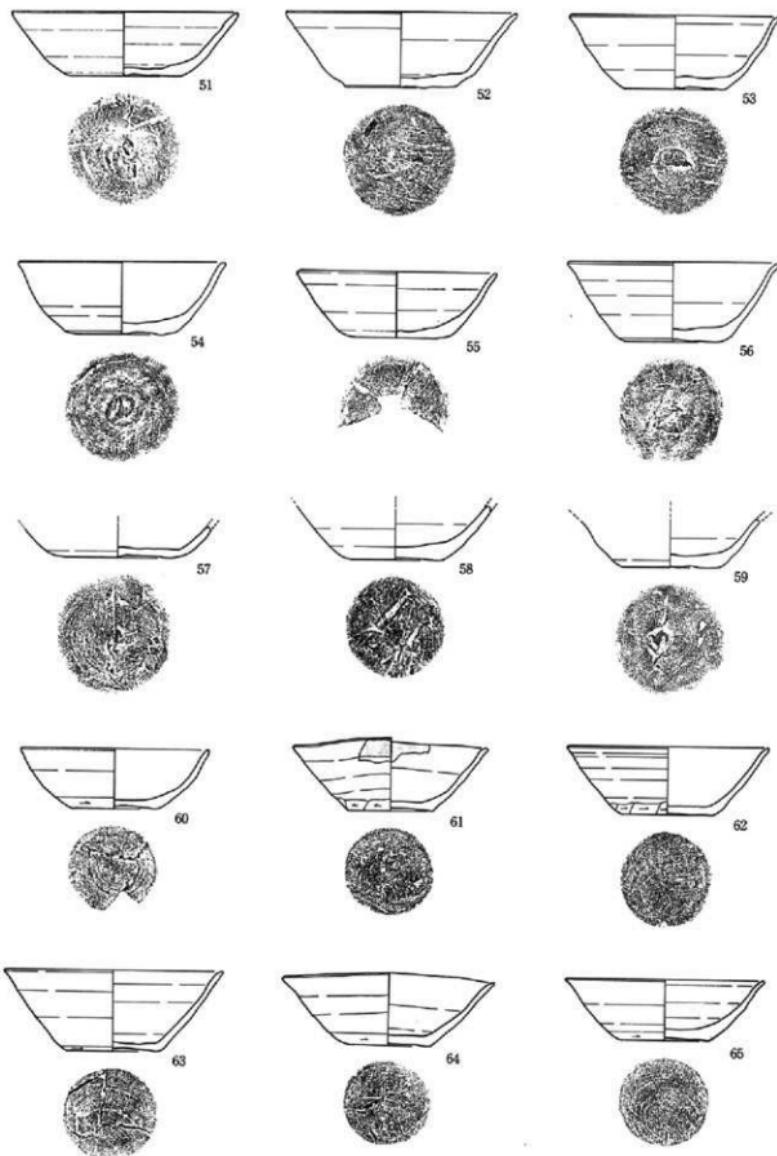


第15図 須恵器(2)



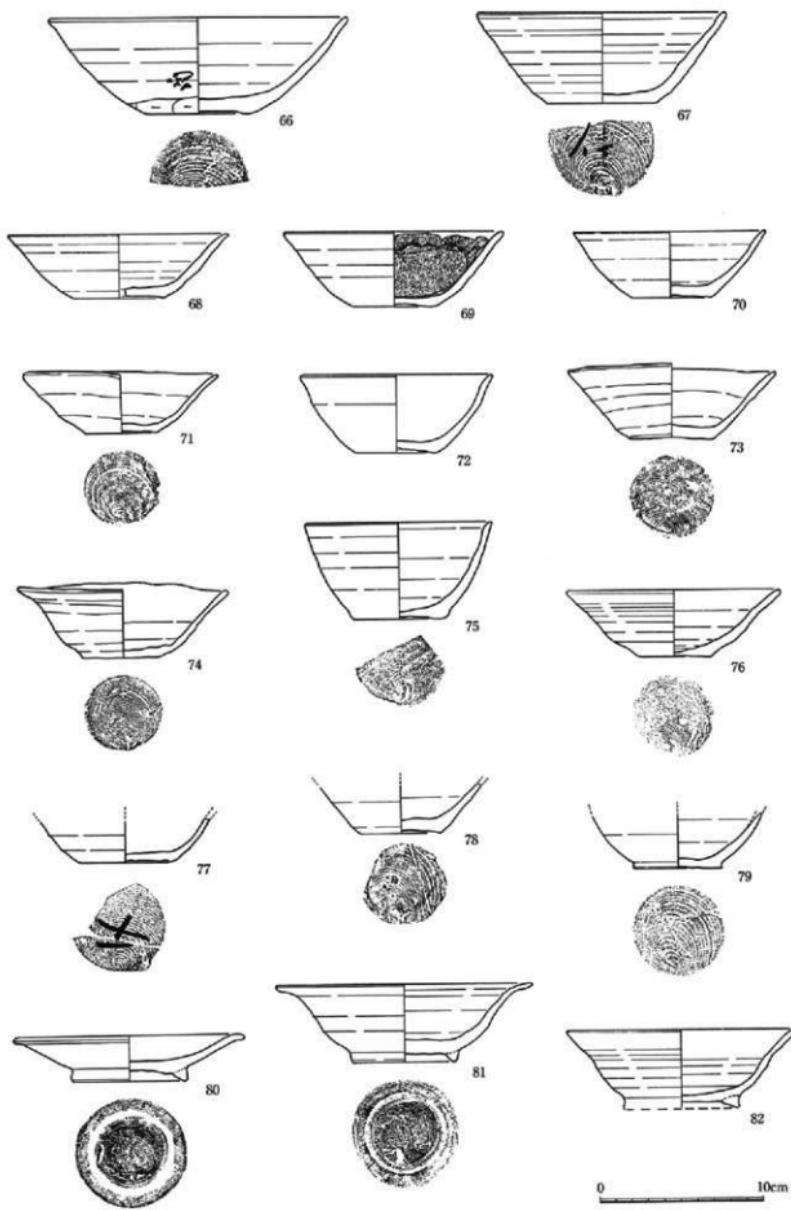
0 10cm

第16図 須恵器(3)

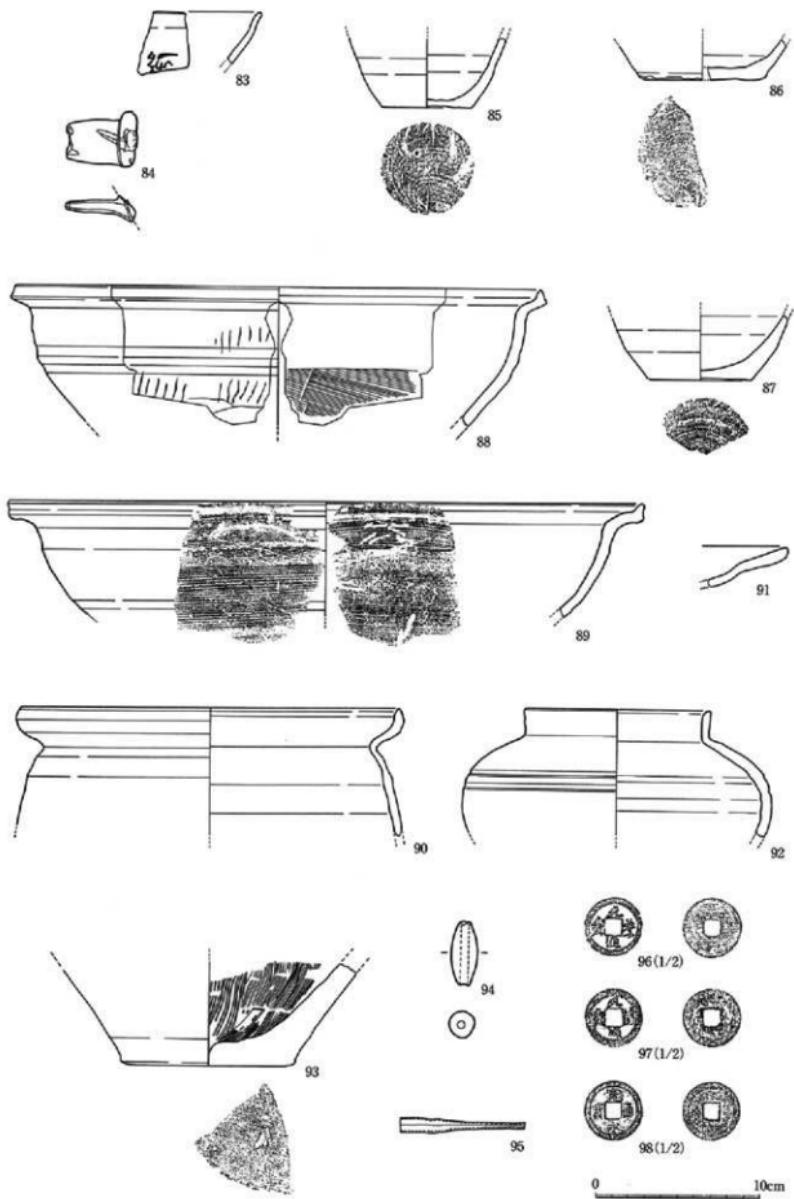


0 10cm

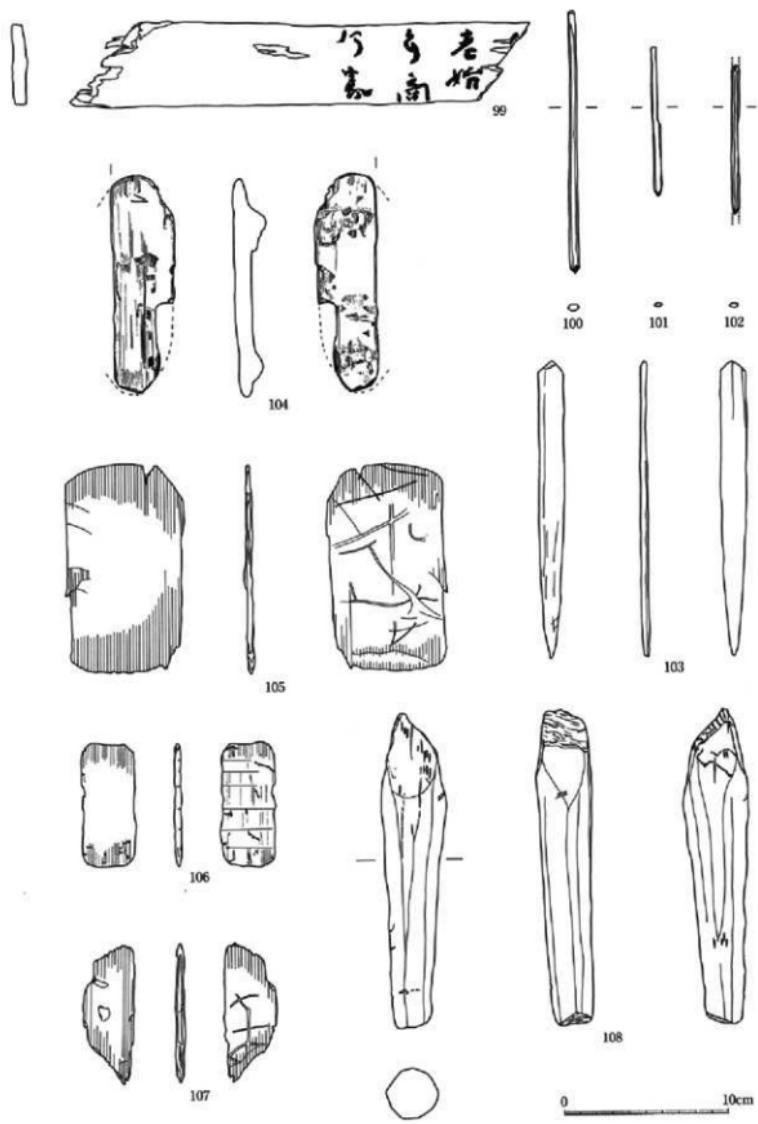
第17図 赤焼土器(1)



第18図 赤焼土器(2)



第19図 赤焼土器・中世陶器・土製品・金属製品



第20図 木製品

表1 遺物観察表(1)

探査番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm)				底部距離	調整技法		出土地点	備考
				口径	底径	器高	器厚		外面	内面		
第13回	1	土師器	壺	(78)	(23)	15	木製痕	ハケ目	ハケ目	58-36 II		
	2		壺		(28)	8		ミガキ	ミガキ	S K48		
	3		壺	(52)	(42)	5	回転糸切		*	71-32 II		
	4		壺	(124)	62	58	6	*	*	S K44		
	5		壺	(124)	52	52	4	*	ヘラケズリ	*	SB1EP5	
	6		壺	(114)	52	51	4	*		*	S K47	
	7		高台付壺	(135)	64	50	5	*		*	S K67	
	8		壺	(154)	62	59	4	*	ヘラケズリ	*	SE15F7	非内墨
	9		高台付壺	(156)	78	68	5	*		*	S K45	*
	10				74	(50)	8	*		*	S D702	*
第14回	11	須恵器	壺	(140)	(86)	33	4	ヘラ切			78-32 II	
	12		壺	(130)	(72)	31	3	*			73-31 II	
	13		壺	(128)	(74)	35	4	*			S K48	
	14		壺	(140)	(90)	38	5	*			S K41	
	15		壺	124	80	31	4	*			74-32 II	
	16		壺	(125)	80	31	3	*			S K45	
	17		壺	131	80	35	5	*			73-39 II	
	18		壺	(136)	(62)	36	4	*			73-31 II	
	19		壺	(136)	70	32	4	*			73-31 II	
	20		壺	(136)	68	33	3	*			73-31 II	
	21		壺	127	73	33	5	*			71-31 II	
	22		壺	125	64	36	5	*			S K45	墨書「千」
	23		壺		64	(29)	4	*			S D203	*
	24		壺		(70)	(31)	5	*			S P54	内面転用鏡
	25		壺	(129)	(52)	35	4	回転糸切			S K135	*
	26		壺	(118)	(62)	46	5	*			77-33 II	
	27		壺		52	(28)	4	*			78-31 II	
	28		壺		56	(23)	5	*			71-31 II	
第15回	29	須恵器	壺	(130)	(30)	6	ヘラ切	ヘラケズリ			S K103	
	30		壺		(21)	6	*				72-39 II	
	31		壺	(144)	(30)		*				S P110	内面転用鏡
	32	高台付壺	壺	(128)	72	41	4	*			73-38 II	
	33		壺		62	(28)	4	*			75-32 II	
	34		壺		66	(20)	4	*			78-32 II	
	35		壺		(73)	(41)	5	*			72-33 II	
	36		壺	102	(60)	55	4	*			S K48	内外面火拂
	37		壺	(112)	62	55	4	*			74-31 II	
	38		壺	(64)	(40)	3	不明				76-31 II	
第16回	39	横瓶	耳環			7					77-30 II	
	40		壺	96	(57)	7		平行タタキ 同心円状アテ	S K48	外面灰被り		
	41		壺			7	*	*	S K48	(40と同一個体)		
	42		壺	(124)	(69)	5					S K33	
	43		壺	(104)	(58)	11	ヘラ切				72-38 II	
	44		壺	(96)	(85)	7	菊花文	さき口・ハケ目			78-32 II	
	45		壺		(40)	8		平行タタキ 同心円状アテ			74-34 II	
第16回	46	壺	壺	(400)	(96)	12		カキ目・タタキ			72-39 II	
	47		壺	(386)	(131)	12		墨縞模様・タタキ	S K48	外面灰被り		
	48		壺			12					72-31 II	
	49		壺			10		平行タタキ 同心円状アテ			72-38 II	
	50		壺			9		平行タタキ 同心円状アテ			78-32 II	

表2 遺物觀察表(2)

辨図 番号	遺物 番号	種別	器種	計測値 (mm)				底部 切離	調整技法		出土地点	備考
				口径	底径	器高	器厚		外面	内面		
第 17 回	51	赤焼土器	坏	(136) 68	39	4	ヘラ切				74-32 II	
	52			(140) 66	46	4	♦				S K45	
	53			(128) 62	45	3	♦				S K45	外面黒斑
	54			(124) 70	44	4	♦				S K45	
	55			(120) 56	40	4	♦				73-31 II	
	56			(128) 58	49	4	♦				S K45	
	57				66 (19)	5	♦				S K61	
	58				57 (33)	5	♦				77-30 II	外面黒斑
	59				58 (30)	4	♦				S K45	
	60			113 51	37	3	回転糸切	ヘラケズリ			74-31 II	
第 18 回	61			117 52	44	3	♦	♦	♦		S K45	スス付着
	62			(123) 56	42	4	♦	♦	♦		S K45	
	63			(132) 55	49	4	♦	♦	♦		75-35 II	
	64			128 52	44	4	♦	♦	♦		75-35 II	
	65			(120) 54	37	4	♦	♦	♦		73-31 II	
	66			(182) 60	58	5	♦	♦	♦		S D703	墨痕有り
	67			(150) 68	55	5	♦				S K30	墨書「体」
	68			(133) (55)	39	4	♦				72-32 II	
	69			(132) 50	46	5	♦				S K30	墨紙付着
	70			(116) 48	41	3	♦				73-31 II	
第 19 回	71			118 45	39	3	♦				72-32 II	
	72			(116) (50)	48	4	♦				S K46	
	73			127 50	47	4	♦				S E16	
	74			128 47	45	3	♦				S K67	
	75			(112) (56)	58	4	♦				SE15F2	
	76			(130) 44	41	4	♦				S K67	
	77				56 (26)	4	♦				S K70	墨書「千」
	78				50 (29)	4	♦				S D702	
	79				54 (34)	5	♦				76-32 II	
	80			皿 136	68	27	4	♦			S K45	
第 20 回	81			(153) 64	47	5	♦				S K67	スス付着
	82			高台付坏	(139) (70)	(47)	4	♦			S K67	
	83	土器	坏			4					SE15F7	墨痕有り
	84			双耳坏		8					S P1001	
	85				56 (42)	5	回転糸切				74-31 II	スス付着
	86			壺	(74) (24)	6	♦				58-41 II	*
	87			赤焼土器	(60) (40)	6	♦	カキ目			77-31 II	*
	88			壺	(332) (83)	7		タタキ	カキ目		S K45	*
	89				(390) (69)	6		カキ目	*		78-32 II	*
	90			壺	(232) (78)	5					S D734	*
	91			皿		5					78-32 II	
	92			灰釉陶器	(112) (77)	6					72-39 II	
第 21 回	93	金属製品	木製品	中世陶器	擂鉢	(106) (63)	15	静止糸切	鉢目(8条)	S K1014		
	94			土製品	土 繩	[長さ] 40	[幅] 16				X-0	
	95				キセル	[長さ] 76	[幅] 7				57-39 II	銅製
	96					『元豊通寶』	〔初鑄年〕 1078					
	97				貨幣	不 明						
	98					「寛永通寶」	〔初鑄年〕 1656					
	99				板状製品	[長さ] (282)	[幅] (52)	[厚さ] 8			SE15F④	
	100					[長さ] (160)	[幅] 6	[厚さ] 4			S K30	
	101				箸	[長さ] (92)	[幅] 5	[厚さ] 3			S P110	
	102				畜串	[長さ] (91)	[幅] 5	[厚さ] 3	*			
第 20 回	103				下 駄	[長さ] 180	[幅] 16	[厚さ] 4			S K30	
	104				曲物底	[長さ] (132)	[幅] (39)	[厚さ] 20	*			
	105					[長さ] 128	[幅] (72)	[厚さ] 4			SE15P7	
	106					[長さ] 76	[幅] (33)	[厚さ] 4			S K48	
	107					[長さ] (85)	[幅] (31)	[厚さ] 5			SE15P7	
	108				棒状製品	[長さ] 191	[幅] 40	[厚さ] 31			S K30	

V まとめと考察

中田浦遺跡は、遊佐町を流れる高瀬川右岸の自然堤防上に立地する平安時代前期の集落跡である。今回の調査は、県営ほ場整備事業（高瀬川地区）を原因とする緊急発掘調査で、遺跡にかかる事業実施範囲のうち削平を受ける区域を対象にしたものである。調査面積は約3,400m²で、遺跡全体のごく一部が明らかにされたに過ぎないが、検出された遺構・遺物をもとに考察を加えて調査のまとめとしたい。

調査では掘立柱建物跡・井戸跡・土壙・畝状溝跡群などが検出された。建物跡は母屋や倉庫跡と考えられる4棟が検出され、主軸方向や位置関係等から同時期に存在したと推測される。4棟の建物跡には規模から見て母屋（SB1）と付属屋（SB2）、それに縦柱となる2棟の倉庫（SB3・4）が存在したと考察でき、一時期における配置状況が窺える事例と言える。年代的には、SB1の柱穴E P 5掘り方より出土した土器器坏（5）から、9世紀代中葉の建物跡と判断できよう。井戸跡は丸木船を転用した井戸枠を持つSE15と、縦板・横樋で構築されたSE16の2基がある。これらの掘り方から出土した土器も9世紀中葉の所産と考えられ、位置関係からSE15はSB1外の建物跡に付随したものと認識できる。また、畝状溝跡群もその方向性から建物跡に伴って存在したと判断される。これら遺構の分布や配置関係から、当時の居住域と生産域との区分といった土地利用状況が窺われる。さらに、建物跡・井戸跡・畝跡や廃棄用の土壙等の遺構群で構成された範囲を一単位とすれば、これら幾つかの集合体が本遺跡の集落を形成していたと考えられる。すなわち、A区に見られる建物跡を主体とした遺構群の在り方は、集落内での一単位が具体的に現れたものと言えそうである。

一方、出土土器の観察から集落が営まれていた時期は概ね8世紀末葉から10世紀前葉に掛かるが、種別割合で赤焼土器が卓越する内容から考察して主体は9世紀中葉～後半と推定された。遺構内出土遺物を基にした年代観と遺構の変遷は、以下のようにまとめられる。

I期：坏類の底部切り離しはすべてヘラ切りで行われ、須恵器坏A・B類を主体とする土器群でSK48での組成に代表される。時期は8世紀第4四半期～9世紀第1四半期までの幅が考えられる。

II期：坏類の切り離しに糸切り形態のものが含まれる。SK45にその組成内容が窺われ、赤焼土器坏A類の存在から9世紀第2四半期を中心とする時期に比定される。

III期：SK45に後続する土器群でSB1・SE15・SD703等の組成に代表される。9世紀第2四半期～第3四半期にかけての時期が考定される。

IV期：須恵器の供膳具が著しく減り、底部の縮小化に伴って切り離しは糸切りが普遍的となる。赤焼土器坏B類が主体となる土器群でSK30・44等の組成に代表され、時期は9世紀第4四半期に当たる。

V期：供膳具としての須恵器が払拭され、赤焼土器坏は口縁部が外反する器形に変容する。10世紀第1四半期が中心と推測され、SK67での組成に代表される。

図 版



調査 A・B 区全景(南上空から)



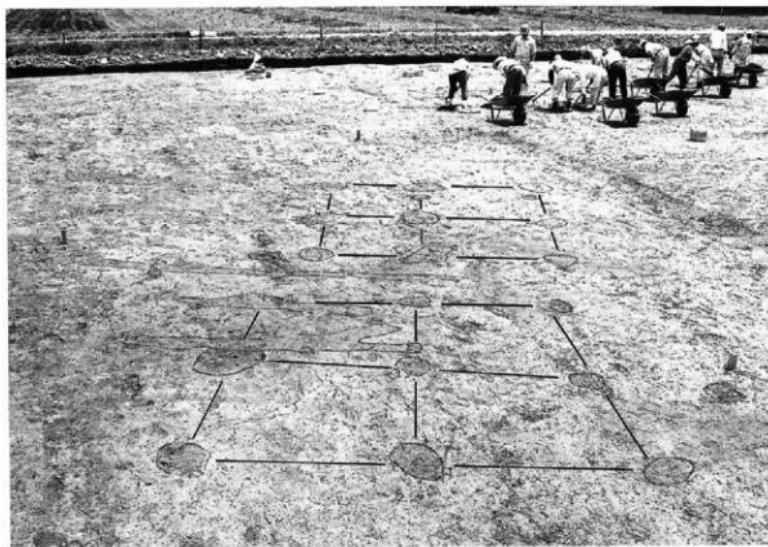
A区調査前状況(北から)



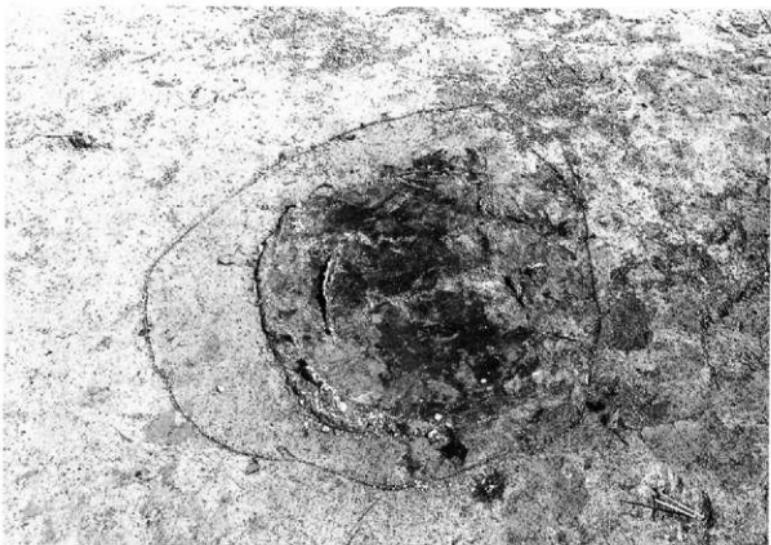
B区表土除去・面整理(南から)



SB1・2 挖立柱建物跡検出状況(南から)



SB3・4 挖立柱建物跡検出状況(西から)



SE15井戸跡検出状況(西から)



SE15井戸跡立ち割り状況(南から)



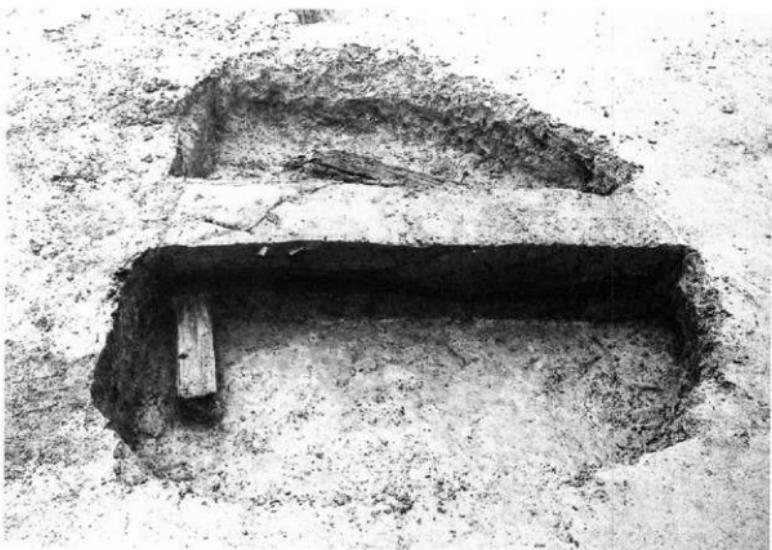
SE15井戸跡土層断面(南から)



SE15井戸跡完掘状況(南から)



SK23土壤土層断面(南から)



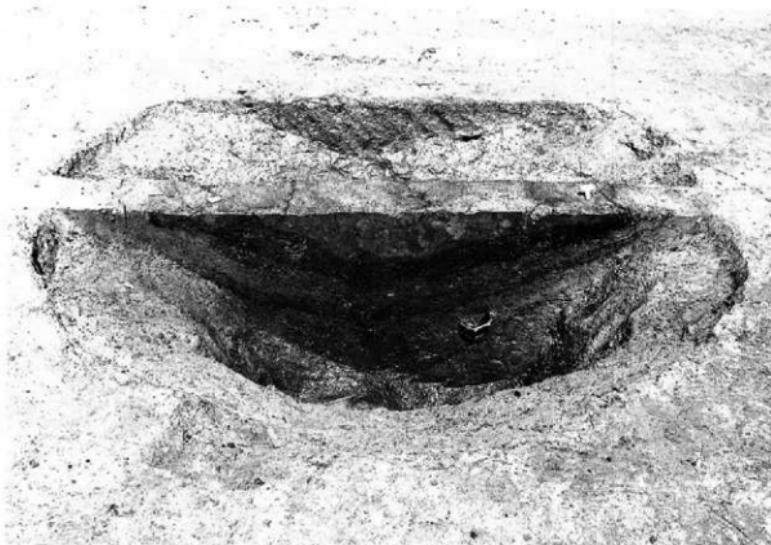
SK30土壤土層断面(南西から)



SK44土壤完掘状況(東から)



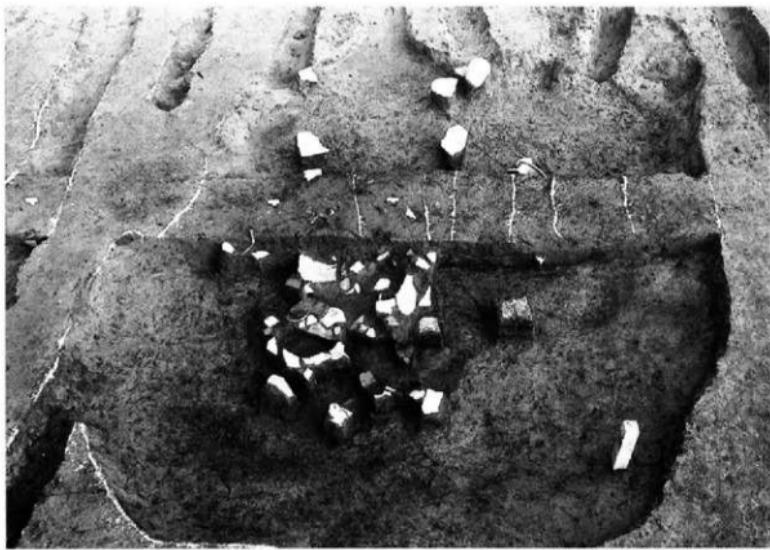
SK45土壤土層断面(南から)



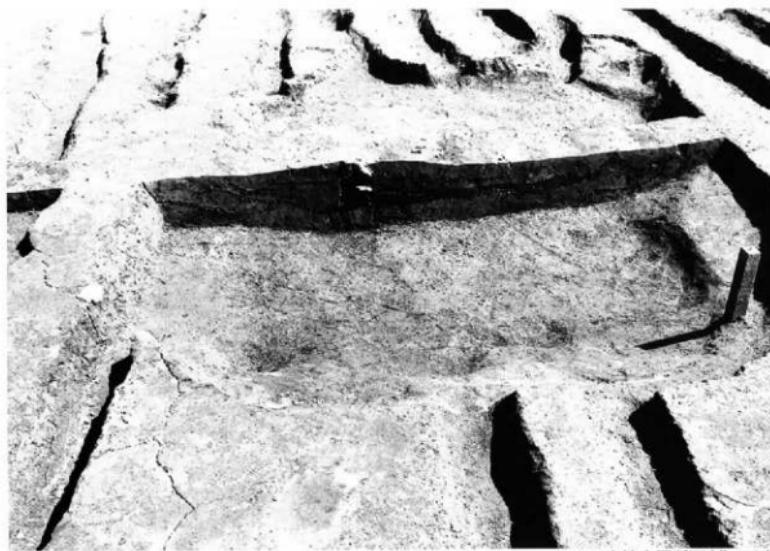
SK67土壤土層断面(南西から)



SK67土壤遺物出土状況(北から)



SK48土壤遺物出土状況(北西から)



SK48土壤土層断面(北から)



B区遺構完掘状況(南東から)



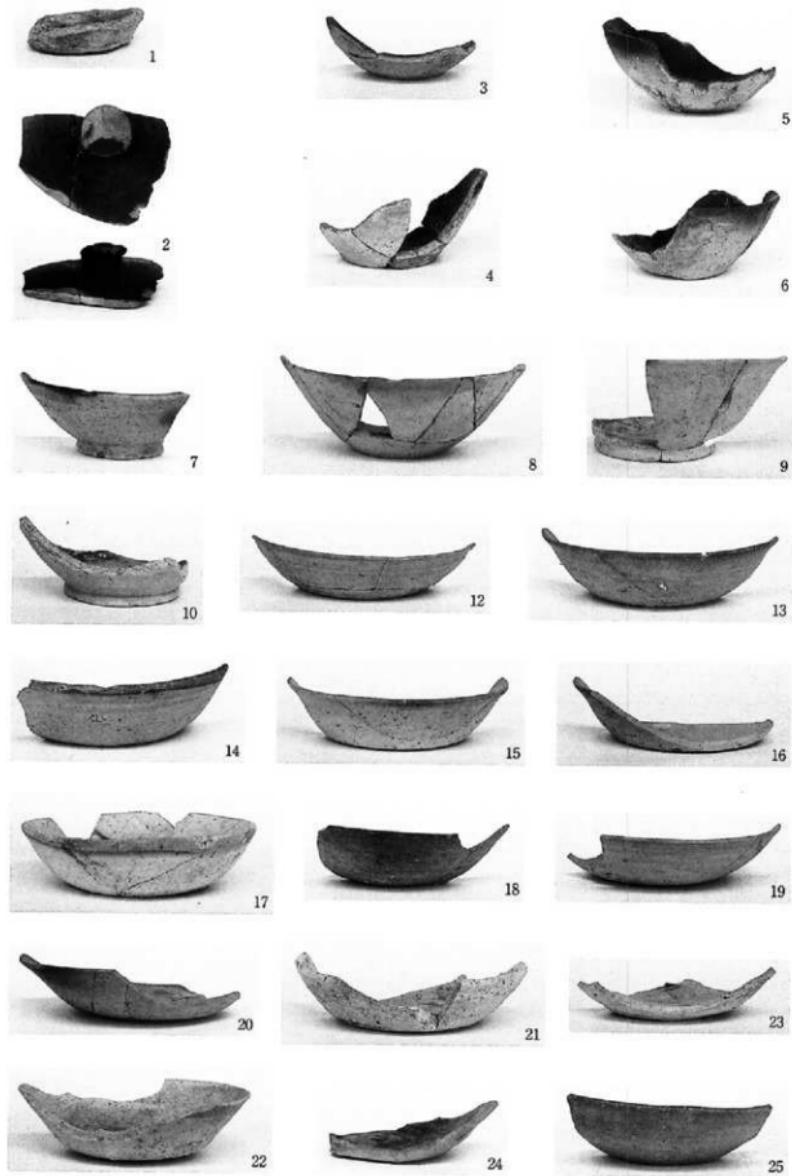
5 トレンチ遺構完掘状況(南から)



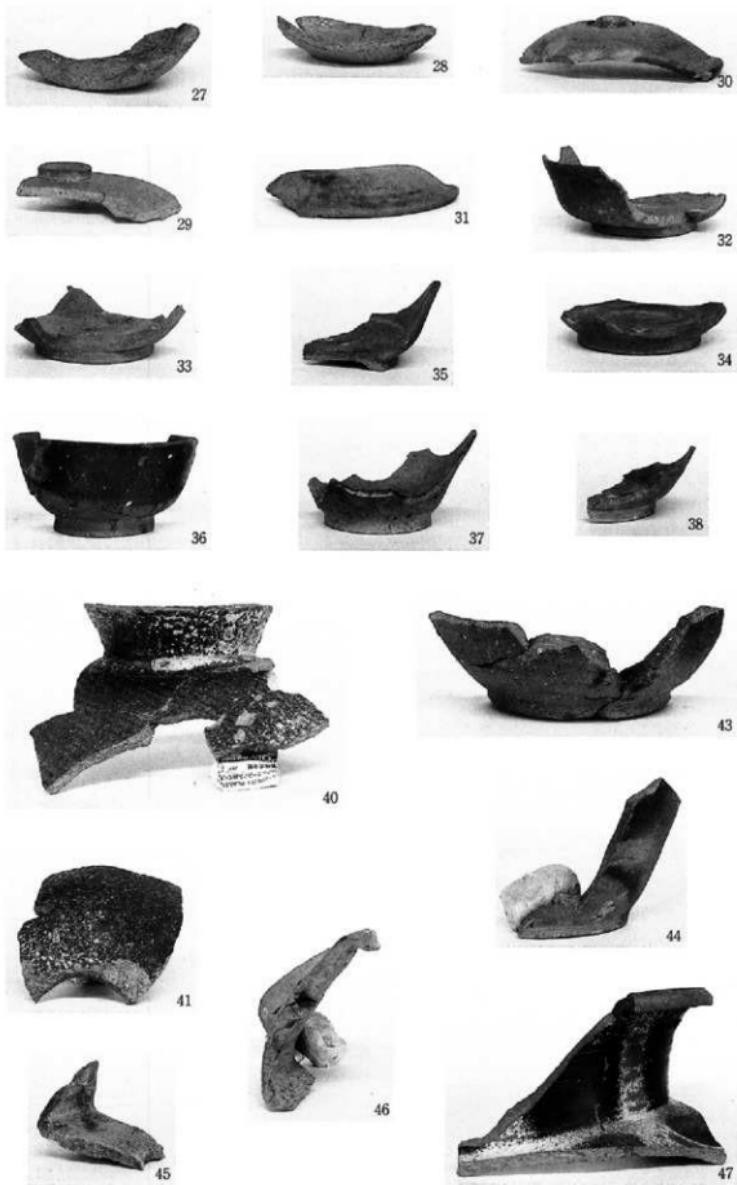
A区完掘状況(西上空から)

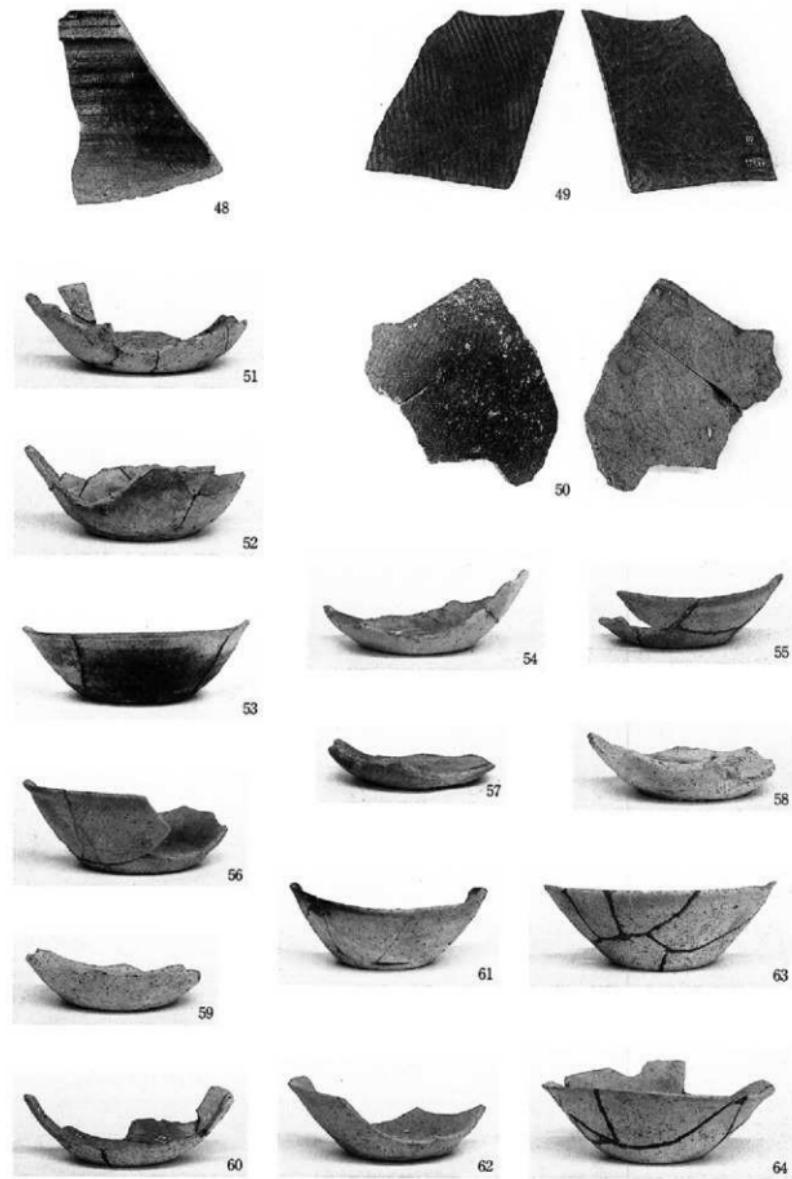


B区完掘状況(西上空から)

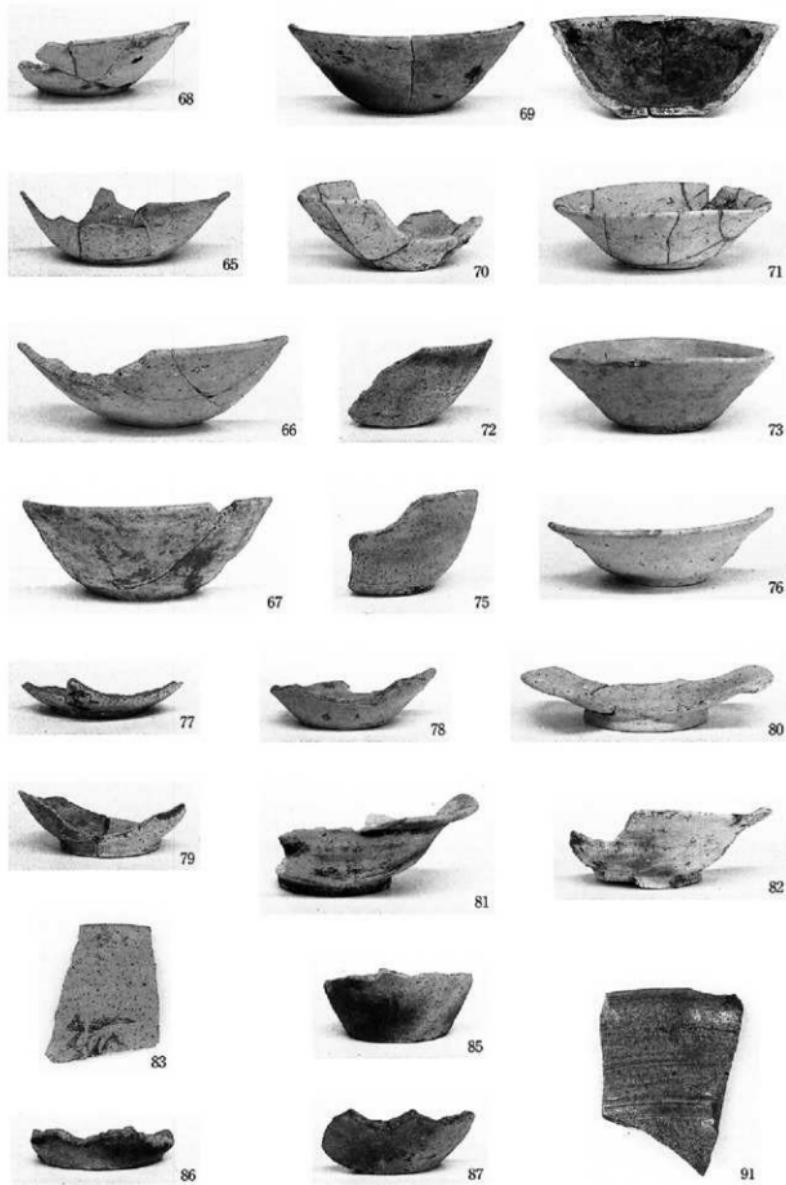


出土遺物(1)





出土遺物(3)





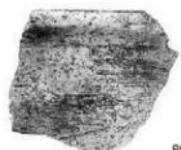
88



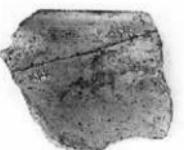
89



92



93



90



93



96



97



98



95



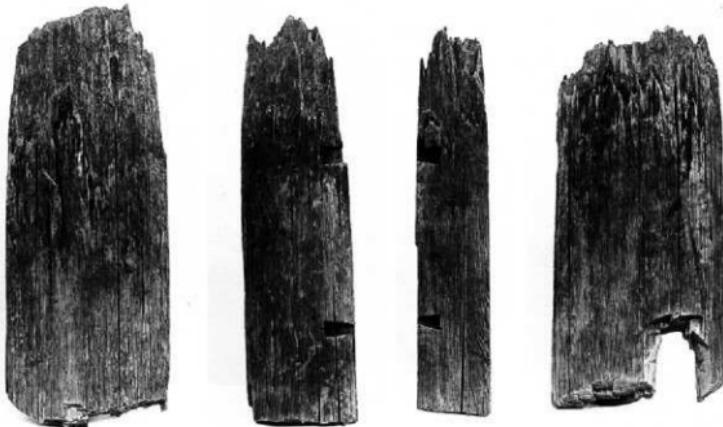
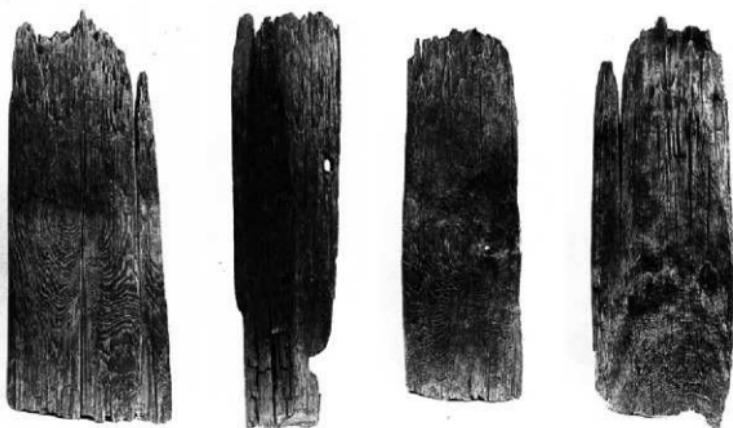
SD738溝状遺構出土種実
(株式会社パレオ・ラボ撮影)

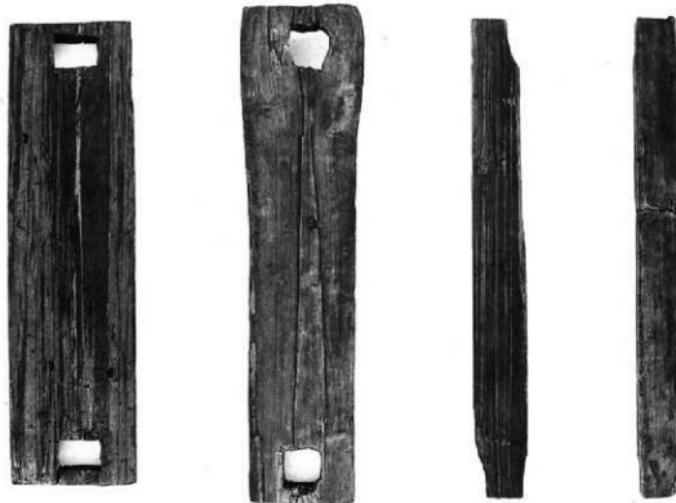


99

赤外線写真

出土遺物(5)





SE15井戸枠(2)

山形県埋蔵文化財調査報告書第185集

なか た うら 遺 跡
中 田 浦 遺 跡
発 挖 調 査 報 告 書

平成5年3月25日 発行

発 行 山形県教育委員会
印 刷 山形印刷株式会社
